

望あり、明治四十年選ばれて三重縣會議員となり、次いで郡會議員に選ばれ四十一年十一月神戶村々長に當選し各一期間勤務す、大正二年四月神戶村々會議員に當選、同四年再び三重縣々會議員に選舉せられ大正六年四月村會議員に再選、同八年再び神戶村々長に當選し一期にして辭し昭和二年一月三度神戶村々長に選ばれて現在に至る、永濱家は地方の豪家にして又舊家なり、養父團治氏は長く名賀郡々會議長の榮職にありし人にして其一族は悉く名門を以つて稱せらる、因に息秀夫君は三重共立工業合資會社常務として製繩業に従事す。

中西傳内君

神戶村大字上神戶 明治十九年三月三十日生

家族 妻たつ(四一)阿保町別府福森猪之吉二女、長男理(一九)長女孝子(一五)二男致男(二三)三男雪(九)二女妙子(二)

中西君は現神戶村助役なり、父は次左衛門、母はみの其長男に生る、資性温厚にして村民の信任あり大正元年一月同村消防小頭に任せられて就任五ヶ年、大正三年四月米穀検査員に任命され六ヶ年勤務し信任日に厚きものあり、大正八年三月には選ばれて上神戶區長となり就職六ヶ年、大正十三年三月には神戶村助役に當選して現在に至る。

中川徳三郎君

神戶村大字古郡 明治二十一年四月五日生

家族 父字内(七九)妻もも(四一)同字川本伊三郎長女、長男敏彰(二三)

中川君は農を業とする神戶村の有力者なり、資性豪放磊落にして衆望あり、選ばれて大字區長たること四ヶ年、又村農會役員として之に貢献すること多く村民の信任日に厚きものあり、大正十四年五月には村會議員に選ばれて現在に至る、前途ある青年活動家なり。

中村乙吉君

神戶村大字比土 明治十四年十二月 日生

家族 長男正典(二五)長女きさ(二〇)

中村君は有名なる比土桃山の經營者なり、資性公共心に富み地方開發について常に力を致しつゝある人なり、明治四十二年今の桃山山林三反歩を開墾し桃樹三百本を植栽し漸次擴張して現在では四町餘歩桃樹又四千本の多きに達し比土桃山の名を關西に知らしめ花時の遊覧客は殆んど利到する狀況にあり、其趣向の達眼なる賞すべきものあり。

中森安太郎君

神戶村大字上神戶 明治廿五年十二月十五日生

家族 妻いさ(三三)美濃波多村新田森田留石長女、長男陸男(一〇)二男敏武(八)三男伸(三)

中森君は神戶小學校訓導なり、父は熊藏、母はふさ其長男なり、大正二年京都府立師範學校を卒業同府下久世郡菟道小學校に奉職七週間現役に召されて國民軍幹事適任証書を受領す、大正六年同郡四牧小學校に轉任を命せられ大正七年歸郷、美旗小學校に奉職、大正十四年神戶小學校に榮轉して現在に至れる人なり、兒童体育獎勵に興味を有し庭球を好む、又誤樂として圍碁を研究す。

柳本清次君

神戶村大字上林 明治三十三年一月三日生

家族 父鹿松(四五)母まさの(四〇)妻きぬえ猪田村大字猪田中家より、長女千鶴子(二)妹美代子(一五)阿山高女在學、同千代子(一一)

柳本君は名賀農學校教諭にして現神戶村在郷軍人分會長なり、大正八年三月久居農林學校を卒業依那古小學校に農業教員として奉職大正十年十二月一年志願兵として歩兵第九聯隊に入營、大正十一年三月末滿期除隊、同年七月名賀農學校に奉職し大正十三年三月歩兵小尉に任官正八位に叙せらる、大正十四年四月神戶村在郷軍人分會長に任せられ現在に至る、資性温厚にして前途幾春、地方民の期待を受けつゝある人なり。

町井貞敏君

神戶村大字併川 明治十六年八月十五日生



家族 母せい、妻鏡、同字町井本家より、長男一衛(一五)龜山農林學校在學、二男二作(九)二女美子名張高女在學、三女照子(一一)

町井君はドクトルメヂチーネの學位を有し岡波病院の第三部長として主に産婦人科の擔任をなす、明治四十二年十一月岡山醫學專門學校を卒業後同校病理部に入學四十三年四月同校助手に任命せらる、同年九月同校講師を拜命四十四年一月同校を辭し京都醫科大學婦人科に入學す、翌年四月同大學を退き獨乙國ウルツブルヒ醫科大學に入學す、大正二年十一月同大學を卒業し同大學大學院に入學同三年八月歐洲戰亂の爲め急遽歸朝、以來岡波病院に勤務して現在に至る、資性温厚にして寡言なるも同情心に富み患者に對しては特に懇切丁寧を極むる爲め尊敬する者多く岡波病院の隆昌と共に其名聲を博し

つゝあり。

藤山 茂君

神戸村大字上神戸 明治三十三年二月二日生

家族 母こはる(五五)弟佳夫(二三)妻房(一九)比奈知村上比奈知川崎鶴松長女、長男茂一(六)長女すが(五)二女けい子(一)
藤山君は猪田小學校訓導なり、大正七年縣立上野中學校を卒業後師範學校第二部に入學同部卒業後度會郡一之瀬小學校に奉職、同年九月同郡中川小學校に轉任を命せられ十年名張小學校に轉じ十六年現在の猪田小學校に榮轉現在に至れる人なり、性快活にして常に兒童教育の改善を研究す、前途を期待されつゝある人なり。

五升出金助君

神戸村大字北山 明治十九年十一月一日生

家族 父鐵次郎(七二)妻しか(三一)比自岐村宮浦亥之助長女、長男道(一一)二男勝(一六)
五升出家は神戸村の舊家にして其姓は往昔瀧川三郎兵衛が織田信雄の命により丸山に城を築きたる當時自家の邸内にある靈泉を飲料水として毎日五升宛を貢したるより其姓を許さると傳ふ、今尙同家の屋敷内に五升出井と稱するあり不淨を厭ひ四連繩を張る君は指物職を業とし特に欄間の彫刻に妙技を有すと大正五年同村消防小頭に任命せられ忠實業を勵み大

正十一年三重縣知事より表彰さる、又目下丸山農家組合の組織に奔走し之が組合長に擬せられつゝあり

東勢 定雄君

神戸村大字古郡 明治三十年四月十一日生

家族 父清吉(六〇)母かめい(五七)妻岩の(二六)依那古村森寺喜多政治郎長女、二女てる(五)二男俊雄(一一)
東勢君は現神戸村収入役なり、大正二年五月神戸村吏員となり事務に精勵して村民の信任を博す、大正十一年二月収入役に擧げられ徵稅成績を一新し名收入役の名を得、大正十三年本縣表彰規定により振擢表彰さる、大正十五年二月滿期再選して現在に至る前途を期待さるゝ青年活動家なり。

日見光雄君

神戸村大字古郡 明治十五年一月十四日生



家族 父鐵次郎(七二)妻しか(三一)比自岐村宮浦亥之助長女、長男道(一一)二男勝(一六)
日見君は神戸村の古刹眞言宗豊山派中本山常福寺の住職なり、父は

甚左衛門、母はまつ其三男にして愛知縣中島郡千代田村大字今村に生る、年十二才にして常福寺先住日見光如師について出家し其法嗣となる、明治三十三年名古屋中學校を卒業後豊山派専門學校(高等中學)に入學三十六年同校を卒業後進んで明治大學に入り同校を卒業後豊山派中學に勤務し明治四十一年先住の歿後常福寺住職となり現在に至る、資性豪放にして寡慾超人的風貌あり、其徒弟を勞はること眞の父子も及ばるものあり、衆望の歸する處三重縣佛教團名賀郡代議員たること二期、現に豊山派三重縣宗務支所長、豊山派宗會議員にして二等司教六僧都たり讀書旅行と徒弟撫育を無上の樂しみとす。

森永 喬夫君

神戸村大字比土 明治三十一年七月十日生

家族 母こまの(六〇)妻さゆ(三七)種生村高尾西田林右衛門二女、長男一郎(一三)長女ちづ子(九)二男建樹(六)
森永君は神戸村の豪家の主人公なり、明治四十年三重縣立上野中學校を卒業後上京早稻田大學政治科に入學同校を卒業後東京村井銀行、東京府農工銀行等に勤務したるが大正八年嚴父の訃に遭ひ歸郷して家



森本竹次郎君

神戸村大字折川 明治四年九月二日生

事に従事す、大正十二年十一月衆望の歸する處神戸村々長に選ばれたるが大正十五年末辭職して家事に専心しつゝあり前途を囑目されつゝある紳士なり。



森本君は神戸村の素封家にして農を業とす、明治三

十年大字區長に擧げられ爾來重任して大正五年迄勤績す、又明治三十年神戸村々會議員に選げられ爾來重選此間其令弟福井安之助君が神戸村々長たりし間町村制により退職せしみにて現在に至る、明治三十七年神戸村助役に選ばれ日露戰役の功により勳八等を授けられ四十年退職、大正八年九月衆望の歸する處名賀郡々會議員に當選、大正九年十二月には伊賀鐵道株式會社監査役に選ばれ現在に至る、明治四十二年所川信用組合を組織し其組合長となり大正三年之を合併して神戸村信用購買販賣組合となし其組合長に推され現在に至る、其他明治三十年氏子總代檀徒總代に選ばれて氏子總代は大正五年辭退檀徒總代は今尙勤績す、性温厚にして信任あり村民の尊敬を受けつゝある人なり。

瀬木 俊 明君

神戶村大字下神戸 明治二十三年五月十五日生
家族 妻やぶ(三)龜山町江ヶ室牛尾千代吉二女、長男俊雄(九)二男重生(七)三男隆(三)

瀬木君は眞言宗・天童山無量壽福寺の住職なり、本姓は島崎、父は五三郎阿保町別府に生る、幼名は貞次郎天童山先住瀬木俊海師に養はれ俊明と改む、明治四十三年三月先住の歿後無量壽福寺の住職となり

同年九月早くも同宗々會議員に當選す、大正四年京都東寺大學を優秀の成績を以つて卒業す、同年九月宗會議員に再選し爾來重選して現在に至る、大正十五年以來同宗派なる四國八十八ヶ所の靈場中の一なる六十一番香園寺内にある三密學園講師を囑托せられ大半同地に出張す、傍ら宗教新聞「人と佛」に執筆中、前途幾春秋宗教界の囑目を受けつゝある人なり

比自岐村

河内 眞 岳君

比自岐村大字岡波 明治二十八年九月九日生
家族 妻みよ子(二)高知市南興力町仙石敏姪、長男晃(二)弟淑(一五)母チヨ

河内君は眞言律宗光福寺の住職なり、父は眞岳其二男なり、幼名藤三郎大正五年九月出家して眞岳と改む、初め眞言律宗官長稻垣眞應師の紹介を得て錦生村安部田寶泉寺泉最善師につき得度し大正六年現寺

辻

衡君

比自岐村大字摺見 明治元年十二月十四日生
家族 父兵助(八八)妻さだ(五二)同字腰山猪之助姪、長男正夫(三)四)上中及び師範二部卒業目下比自岐校訓導、二男晋(三一)上野中ノ立町三好屋雜貨店主、三男好三(一九)藥劑士、姉のい(二八)古山村菖蒲地吉川猪之助二女、内孫俊子、高夫、真幹

に住職す、大正十年猪田村佛勝寺兼務住職を命せられて現在に至る、佛恩を思ふの念厚く來住以來光福寺本堂の大破せるを嘆し之を修繕し次いで佛勝寺本堂の修繕をもなして現在に至る、前途ある僧侶として尊敬せらる。

垣本 義 憲君 比自岐村大字岡波 明治十四年八月十日生
家族 妻さめへ箕曲村青蓮寺垣本安太郎長女、長女さみ子阿山高女在學

垣本君本姓は竹内、幼名義造、錦生村大字安部田に生る、後義憲と改め長じて垣本家に入婚して其姓を冒す、現比自岐小學校長なり、明治三十三年代用教員として瀧川第二小學校に奉職後名張小學校に轉じ一端辭職して京都府師範學校に入り同校卒業後同府下相樂郡木津町の小學校に奉職後京都西陣嘉樂小學校に轉じ同校に七ヶ年勤績後三重縣へ出向を命せられ箕曲、瀧川、藏技の各校に勤務し後瀧川第二小學校長に轉じ後更に比自岐小學校長に榮轉して現在に至る、性温厚篤實父兄間に信任を博しつゝある人なり、餘暇園藝を楽しむ。

辻君は比自岐村現村長なり、明治二十五年三月三重縣立師範學校を卒業朝明郡一色小學校訓導に任せられ同年十月富洲原小學校に轉じ十一月同校長に榮進す、後二十六年四月上野忍町小學校、二十七年十月依那古小學校長、三十一年六月猪田校長、三十五年二月名賀郡南部高等小學校訓導、四十年七月同校長四十二年六月同上裁縫女學校長兼任、四十三年四月名張校長、同裁縫女學校長、四十五年二月龜山第二小學校長、同年四月鐸鳴女學校講師兼任となる、同年五月辭して歸郷衆望の歸する處大正二年四月村會議員に當選、三年四月學務委員に擧げられ八月比自岐信用組合長理事となり、大正四年名賀郡會議員に當選一期間在任、七年一月信用組合理事に十年一月重選、大正十三年十一月比自岐村長に當選して共に現在に至る、村民間に信用ある人なり。

浦田 爲三君

比自岐村大字比自岐
明治廿七年十二月廿五日生
家族 母、さん(六〇)妻しず(二八) 同村員増金太郎女、長男正志
(八)長女英子(五)二男成正(二)

浦田君は縣社比自岐神社の社司なり、大正三年神宮皇學館を卒業し後父の職を襲ふて比自岐神社々掌となる、爾來同神社の由緒顯著なるを知り當然縣社或は國幣社の資格あるものとして其基本金の造成より昇格の運動を起し百方苦心の結果大正十三年十二月十二日昇格を實現せしむ、性活潑霸氣あり前途を囑目さる、信任あり名賀郡神職會幹事に擧げらる浦田家は代々比自岐神社の神職にして其祖は浦田出羽守に發し爾來君にて二十六代なりと、郡内有數の舊家なり。

前川 定次郎君

比自岐村大字比自岐
明治十七年五月十九日生
家族 母、よし(七三)妻たつ(四) 同村員見山本乙五郎妹、長女あや子
(七)二女二三子(四)

前川君は現比自岐村助役なり、明治三十九年三重縣師範學校を卒業國津小學校訓導に任せられ後上津小學校に轉任、明治四十三年高尾小學校長に榮轉四十五年同實業補習學校長兼任を命せられ大正四年美旗校長に大正六年十一月國津校長に轉任、大正十三年

淺野 貞之輔君

比自岐村大字岡波
安政五年二月一日生



長野町奥田文右衛門二女、孫文敏(一九)敏子(一七)正敏(一三)

淺野君は比自岐村の元老とも言ふべき人にして地方の功勞者なり、初小學校に職を捧じ市部、丸山、比自岐の各學校に勤務し柙川外六ヶ村戸長役場聯合會議員に當選、次いで町村制實施と同時に村會議員に當選し重選四期に及ぶ、明治三十六年九月には選ばれて名賀郡會議員となり次いで副議長に當選す、明治四十年九月再び郡會議員となり選ばれて郡會議長に榮職につく、其他明治二十三年には伊賀製油藥種改良組合總理、二十二年には村消防組頭、名賀郡茶業組合長、明治十七年には村學務委員等に當選した

三月退職功により三級下俸に進められ恩給年金年額五百七圓を賜ふ、大正十四年一月選ばれて比自岐村助役となり現在に至る、資性温厚にして寡言實行を好むの士にして村民の信任あり、前途を囑目されつゝあり、崇佛敬神の念強く愛犬家なり。

福井 邦造君

比自岐村大字比自岐
明治廿四年十一月廿四日生
家族 祖父金兵衛(九)父始太郎、母うめ、妻なか(三)依那古村才良辻熊次郎女長男詮平(一三)二男榮介(九)三男實三(三)

福井君は酒造販賣を業とす銘酒福ノ聲の醸造元なり明治四十四年同村役場書記を拜命、大正二年收入役に擧げられ大正六年推されて同村助役となり大正十二年十二月辭任退職す、大正八年同村消防組頭に任命せられ大正十三年一月比自岐信用購買販賣組合長理事に就任して共に現在に至る、資性温厚村民の信任厚く前途を囑目されつゝある人なり、又父始太郎氏はかつて村會議員に擧げられたることあり、現に比自岐區長として衆望を蒐む、同家は舊農を業とせしが、祖父金兵衛氏失敗して財を失ひたるを始太郎氏が家政挽回に努め始め封鍋賣より身を起し魚行商人となり小資を得て織物業を創め大成して明治三十三年現在の酒造業を經營今に至れるなりと。

る等其地方的に貢獻したる實に枚舉に遑なし、功により赤十字社海員救濟會の特別社員に列せらる、淺野家は近郷の舊家にして其祖先に次兵衛尉安種なる者あり、豊公に仕へ丹波知多郡にて三千石を食む、其、孫繁殖し享保年間官に請ふて郷土の氏神比自岐神社に贈位を申請し享保三年九月妙法院堯延親王の御眞筆にて正一位大森大明神の額を賜ふ今尙同神社に藏す。

阿保 町

岩名 諒吉君

阿保町大字阿保
明治十二年九月二十三日生
家族 妻奈良千代、長女しかへ、婿健治美濃度多村新口森永是憲次男、次女あゑ同町住澤隆妻、孫きよ

諒吉君は花垣村豫野平島明彦氏の弟にして岩名家に入家す、水車精米業並に米穀商を營む、創業年代は詳かならざれども文化年間の書類のある處より考ふれ

ば其以前に開業せしものならん、舊は製油製粉業も兼營せしが今廢して精米專業となる、諒吉君大正十四年一月阿保町西區長に選ばれ現在に至る。

岩 秀 名 松 君

阿保町大字阿保 明治十年三月十日生



家族 妻きわ、長男清尚、嫁こう、丸柱村秋野省三、姉長女清子、東、京神山區宮本町、豊生才二郎妻、係光千、葵十

岩名君本姓は大矢、阿山郡丸柱村に生る大矢光三氏の令弟たり長し

て岩名家に入る、性妥協性に乏しく純理の前には何者にも一步を譲らず、故に其人格を崇拜する者多きも反面には當然の反對者もあり、明治二十七年滋賀縣立八幡商業學校を卒業、明治四十年九月名賀郡會議員に選ばれ四十四年九月再選同年十月郡會議長に推さる爾來改選ある毎に重選常に議長の榮職を占め郡治上貢獻する處尠からず、大正九年一月上野稅務

署管内營業稅調查委員に選ばれ大正十年阿保町會議員に當選同十四年三月阿保町長となり現今に至る、崇高なる人格の持主なるだけに政敵の嫉視甚だし、稀れに見る硬骨男子にして郡内唯一の長老なり。

福 垣 眞 應 君

阿保町大字寺脇 弘化元年十月二十三日生

家族 弟千數名あるも同居せず

稻垣君は同町別府の出生なり、年七歳にして寶巖寺先住眞教帥につき出家得度し後同郡神戸村下神戸無量壽福寺に入りて佛道の修業をなす、資性温良明敏夙に天稟の才能あり、幾何もなくして密宗の蘊奥を會得す、君を教ふる者其明敏さに驚嘆すと、後比自岐村金泉寺住職となり年十八歳にして寶巖寺に住し此間常に佛典の研究を怠らず學識大いに擧る、明治三十九年三月遂に選ばれて眞言律宗大本山西大寺管長職の榮位を占め大僧正に任せられ現在日本に於ける名僧高德として稱せらる、君は幼より殆んど獨學を以て今日の榮位を占めたるものにして他の僧と其規を同ふせず實に稀れに見るの立身出世と云ふべし我伊賀に於て一宗の管長大僧正を出したるは恐らく稀に見る處ならん、伊賀の偉人を語る内に君の存する事は尠くとも伊賀の誇りとするに足るべきものな

りかたふべし。

富 岡 岩 次 郎 君

阿保町大字阿保 明治五年八月十三日生



家族 妻いよ、滋賀縣犬上郡彦根町、伊部末吉妹、長女榮子、京都、上京區風瑠町住、二女二三子自宅

富岡君は阿保町の助役にし、て有名なる旅館俵屋の主人公なり、明治

三十八年四月阿保村役場書記となりそれより收入役助役村長に進み四十二年退職四十四年七月より京都市上京區書記を拜命し大正十四年まで勤続二月辭職して歸郷し阿保町助役に就職して現在に至る、家は旅館を經營し俵屋と稱す名賀郡中名張喜多藤に次ぐの優良旅館として名あり。

小 川 正 君

阿保町大字阿保 明治六年八月二十六日生

家族 妻たづ子、上野町魚町奥地源十郎二女、二女頼子、阿山高女卒業、三女三重子、阿山高女在學

阿保町 ト、オ、ソ、カ之部

小川君は阿保郵便局長なり、家は醬油醸造を業とす常に盆栽を好み、四時花を絶やさすと云ふ、大正十一年阿保郵便局長を拜命し大正十四年四月阿保町會議員に擧げられ現在に至る、常に簡易保險の獎勵勸誘と貯金奨励に不斷の努力を拂ひつゝあり、資性温良夙に良局長の名あり。

和 田 駒 次 郎 君

阿保町大字阿保 明治六年四月六日生

家族 妻きわ種生村大字高尾中井直吉姉、養嗣子重伍同町堀水熊吉四男

和田君は吳服太物商を營み政治運動を好む俠骨の氣概あり、明治四十年阿保村會議員に選ばれ爾來重選して大正十年四月迄勤続す、大正三年阿保區長に選ばれ同七年任期滿了退職し同十一年再び區長に選ばれ十五年滿期退職す同十四年三月阿保町會議員に選ばれ現在に至る。

川 原 田 龍 男 君

阿保町大字阿保 明治十九年三月一日生

家族 父伊太郎、母くま、妻きく津市魚町岡清七長女、養女喜美江川原田君は在郷軍人會名賀聯合分會長にして阿保町の醬油醸造家米忠の主人公なり、明治三十七年滋賀縣立商業學校を卒業後大阪高等工業專科に入り醬油醸造の專攻をなす、明治三十九年一年志願兵として

歩兵第九聯隊に入營四十一年三月除隊、後累進して豫備陸軍歩兵中尉に進み在郷軍人會名賀郡聯合分會長として現在に至る、又第十六師管聯合支部評議員に任せらる、大正十五年一月軍人會の爲めに盡粹したる廉により元帥川村景明氏より謝状を受く、又三重縣醬油同業組合評議員なり。

川島柳之助君

阿保町大字阿保 明治十七年三月三日生

川島君本姓は東、種生村大字川上に生る、明治三十八年四月縣立第三中學校(上野中學校)を卒業し後名古屋稅務監督局に奉職し豊橋、津、上野の各稅務署に歴任し明治四十二年川島家に入り川島姓を冒す四十三年職を辭し家業に従事す、大正三年迄種生村川上にありて農業に従事せしが此年阿保町竹内千太郎所有の酒釀造所を買收して酒造業となり現今に至る、此間徵兵に召され三十八年十二月より四十一年十一月迄入營す、圍碁を好み眞言宗を信す。

龜井 曉君

阿保町大字羽根 明治二年七月十三日生

龜井家は名賀郡屈指の舊家にして舊藩時代の大庄屋

十四年二月辭職して家業の農業に精進しつゝあり。

玉川 久 男君

阿保町大字阿保 明治二十七年二月廿八日生

玉川君は阿保町の收入役なり、家族は主として農業に従事し家貧からず、大正十四年十一月阿保町書記より收入役に選任さる藝術を好み眞言宗を信す、資性温厚無言實行を好み風あり、事務に熱心なる良收入役として村民より期待せらるゝ處多し。

田中 力 松君

阿保町大字阿保 明治六年三月九日生

田中君は阿保町の有力者なり、農業の傍ら繭糸業を營みつゝありしを大正十五年一月岩名酒店の權利を買收して酒釀造販賣に従事す、明治三十八年阿保町東部區長に推され前後九ヶ年間勤務、大正二年阿保村會議員に選ばれ爾來重選町制實施と共に町會議員となり現在に至る。

竹田 三之助君

阿保町大字阿保 明治十一年四月二十三日生

竹田君は長男三郎、滋賀縣八幡商業學校卒業、次男達三同字井上安左衛門養子、三男正巳、四男四郎共に小學校在學、長



十三代の孫なりと、家富み地方の大地主たり、曉君夙に書圖骨董を愛し之を愛玩し藏幅多し、大正六年阿保町會議員に選ばれ大正十年再選し十四年滿期退職す、資性温厚にして紳士の風貌あり。

米谷 寅 吉君

阿保町大字阿保 明治八年六月十八日生

米谷家は世々農を業とす大正元年以來農を廢し肥料商となる、寅吉君は明治三十九年一月阿保村役場書記となり四十年三月同村收入役に任せられ四十二年五月には助役に進み大正十三年八月阿保町長となり

女きみ子上野町農人町吉村一雄妻、次女よし子尾鷲高女在學三女かれ奈夏立字陀高女在學、嫁美奈子阿山高女出身阿山郡友生村稻森新三郎二女、孫登美子
竹田君は雜貨荒物商を營み阿保町の有力者として信用あり、家富み薄利多賣の商店として顧客多し、其創業は詳かならざるも百年以上前なりと、長男宇三郎君主として家政を掌り町民の信任あり同町青年團副支部長に現任されつゝあり。

久保 田 信 藏君

阿保町大字阿保 明治十年二月十九日生

久保田君は山邊郡波多野村大字片平の人なり、明治二十八年京都醫學專門學校を卒業し後同校附屬病院に於て實地の研究をなし明治四十年郷里に歸り開業大正十四年三月現地に移住して開業現在に至る。

熊本 重 太 郎君

阿保町大字阿保 明治十七年四月十日生

熊本君は荒物雜貨、煙草小賣業を營み堅實なる得意先多く家政振ふ、圍碁を好み之を好くし淨土宗を信す、大正四年阿保村役場書記に就任したるも家事都合により一ヶ年後辭職す、大正十年阿保町會議員に

選ばれ同十四年再選されて現在に至る。其他大字區會議員等に擧げらるゝ、事前後數回に及び地方自治の爲め盡力す。

矢田 英一君

阿保町大字阿保 明治二十年三月七日生
家族 母きよ子、妻静子一志郡家城村森川小太郎長女、長女英子、二女久子共に小學在學、三女葉子

阿保尋常高等小學校々長にして三重郡小山村大字山田の出身なり、明治四十二年三月本縣師範學校を卒業し直ちに三重郡富須原尋常高等小學校訓導に任せらる、大正元年三重縣師範學校訓導に轉じ同十年名賀郡依那古尋常高等小學校長に榮轉十二年阿保校に轉じ現在に至る、性卒直、業務に熱心にして部下の信任あり、文學、繪畫、音樂等を好む。

山口 恒松君

阿保町大字阿保 明治二十年十月十二日生
家族 母こすへ上津村北山西田達次郎長女、妻いほの神戸村大字上神戶藤森捨松長女、長男源松東京市立東京中學在學、次男稔男小學在學

山口君元は農業を經營す、明治四十年伊賀上野銀行阿保支店に勤務し大正九年辭職翌十年より現在の處に菓子製造販賣を始め大正十三年十二月阿保驛上津村伊勢地間の定期乗合自動車の權利を買収して之を

經營して現在に至る性社交に長ずるを以て交友廣し

山本 重次君

阿保町大字別府 明治二十年四月二十八日生
家族 妻こよ子上津村大字瀨杉澤房次郎三女、長女つ子、長男希一、次男琢次、三女せい子



山本家は伊賀唯一の資産家なり、先代石松氏が一代にして巨萬の富を得、重次君本姓惠村阿山郡阿波村猿野の出生なり、父は保造現阿波郵便局長たり、年十五歳にして山本家に養はれ山本姓を冒す。大正七年阿保町収入役に選ばれ九年辭職す、陸軍豫備輜重兵にして在郷軍人分會副會長となり在郷軍人會の爲め力を致し會長川村元帥より表彰さる、大正十四年上野稅務署管内所得稅調查委員補欠に擧げらる、大字別府の區長代理より大正十五年別府區長に當選現在に至る、前途を囑目されつゝある人なり。

り之が取締役に就任し明治四十年阿保、伊賀貯蓄、上野實業の三銀行を合併し伊賀上野銀行を起し其取締役に就任其他巖倉水力電氣株式會社、伊賀鐵道株式會社、三重合同電氣株式會社等の重役に就任し實業界に貢献する處尠からず、大正十年以來總ての職を退き老後を養ひつゝあり、又以て地方の偉材とすべきなり、書畫骨董を好む。

松本 堯次郎君

阿保町大字阿保 文久二年八月十日生



家族 妻ふさ子一志郡八知村上谷逸見長女、長男誠一(四一)阿保校訓導、長女江(三七)津市西新町中島一郎妻二女静枝上村赤坂菅野直一妻二男馨(三三)變大卒業、三女叔子(二四)上野丸之内(分家)飯南(三四)飯南郡機殿村中川九左衛門長女、孫善生、賢

松本家は阿保町の素封家なり、堯次郎君資性温厚にして衆望あり明治二十四年阿保村會議員に當選爾來重選八期大正十年四月迄勤続す、此間阿保村収入役一期、大字區長一期明治三十七年には所得稅調查委員に擧げられ一期間就任、又阿保町教育會理事たること四期現に其職にあり、君壯年にして勇志あり、地方産業の盛衰は金融機關の完備にありとして明治二十九年五月自ら卒先して有志と謀り阿保銀行を創立して其頭取となり地方金融界の圓滑を期する一方株式會社名張銀行、同伊賀貯蓄銀行等の發起人とな

福井 源松君

阿保町大字阿保 慶應三年十月五日生
家族 妻小まつ同町田中力松姉、長男恒郎八幡商業出身豫備陸軍歩兵中尉、嫁じよ上野町山戸儀平長女、孫新平八幡商業在學、同輩平上野中學在學、同多美小學在學

福井家は阿保町屈指の大商業家なり、米穀製麵製米業を營む、源松君舊農を業とせしが明治十七年現在の水車を買収して營業を開始し家政順に振ひ今日の盛況を見るに至る、性温厚衆望あり、阿保村(町制施行前)村會議員に選ばれたる事あり、現に大字區長に就任しつゝあり、又公共に富み諸種の公共事業に據金を惜まず町民の尊敬を受く、息恒郎君亦父に劣らざる才能を有し家政を掌りつつあれば日に隆昌なるものあり。

福島熊之助君

阿保町大字阿保 日生
明治八年六月

家族 母(三三)東京醫學學校出身三等獸醫兵庫縣技手奉職、次男正男(一七)上中在學、長女静子(二七)上野町西町北澤政治郎養女、孫和子(七)君枝(五)正信(三才)

福島君は農を業とし家富む、資性温厚にして町民の信任あり、衆望の歸する處明治三十六年區長に選ばれ就職一期克く地方の爲めに力を致す、大正十四年四月には選ばれて同町々會議員となり現在に及ぶ。

小西米藏君

阿保町大字阿保
明治十六年一月十二日生

家族 妻と子供一人

小西君は現名賀郡美旗小學校長なり、職を初等教育に奉ずること二十有餘年此間學校の新築をなすもの二校に及び相當の努力をなしたる人なり、子弟教養上人格の向上を期するを目的としそれ等が社會各方面に活動する状況を見て無上の樂みとせる等は君の教育者の人格を窺ふに難からず、明治三十八年七月三重縣師範學校を卒業飯南郡粥見小學校訓導を拜命し四十年三月松阪町小學校に轉じ四十一年三月名賀郡阿保小學校に轉任を命せらる、大正二年三月上津小學校訓導兼校長に榮轉し同四年三月瀧之原校長に

轉じ同十一年三月現在の美旗校長に轉任を命せられて今日に至る、園藝を養鶏を好み眞言密宗を信仰す

新佐業君

阿保町大字別府
明治九年三月十五日生

家族

新君本姓は小川、種生村大字種生の舊家小川秀英の二男なり、長じて新家に入り其姓を冒す現依那古小學校々長なり、園藝、和歌、謠曲を好む、名賀郡教育界の長老なり、明治三十一年三重縣師範學校を卒業し名賀郡南部小學校訓導を拜命、三十一年五月依那古小學校々長に榮轉、大正三年三月本縣北牟婁郡視學を拜命し同七年十二月郡視學を辭して名賀郡阿保小學校長に轉じ同十二年五月再び依那古小學校長となり現今に至れる人にして性温厚父兄間の信任厚く良教育家の聞へ高き人なり。

秋永康年君

阿保町大字阿保
明治二十四年六月一日生

家族 母象、妻正枝同町米谷寅吉長女、弟康入關西製糸伊賀工場に勤務

秋永家は代々郷社阿保神社の社司にして稀に見るの舊家なり祖先の事詳かならざるも天正十五年の棟札に秋永播磨守康績とあるより見れば其舊家なること

窺ふに難からず、康年君明治四十四年上野中學校を卒業後小學校に教鞭を執りしが大正八年父君の死亡するに及び辭して其家職を繼ぎ現今に至る、好古資料の集蒐に趣味を有し盛んに名所舊蹟の踏査をなして樂しむ。

城

勇君

阿保町大字別府
明治二十七年九月九日生

家族 母いわ、妻薰子上野町東町久保家より、長男常宏(四)長女初穂(一〇)次女茂子(三)三女綾子(二)弟眞亮(二六)東京慈惠病院醫學學校在學、妹さよ子(一九)東京實踐高女在學

城君は阿保町素封家の主人公なり、亡父三七氏醫を業としたるが三七氏の歿後は妻薰子専ら醫業に従事して家業を繼承しつゝあり、薰子は東京女子醫學專門學校の出身にして同校卒業後専ら同校にあつて實地の研究をなしつゝありしが後歸郷して上野町に開業し一ヶ年の後城君に嫁して現在に至る、阿保校の校醫を囑托せらる、勇君は縣立久居農林學校の出身にして主として農業に従事しつゝあり、衆望により學務委員に選ばれ現在に至る。

城五平君

阿保町大字阿保
明治二十二年六月廿五日生

家族 妻さ差向ひ

城君は花垣村小學校長なり、小學校教員としては比

阿保町 シ之部

較的順調な階段を得て校長の榮位を得たる人なり、明治四十五年三月縣立師範學校を卒業後阿保小學校に訓導として奉職勤続十二ヶ年、大正十三年三月矢持小學校長に榮轉し大正十五年三月現校に轉勤今日に至れる好運兒なり、自ら言つて曰、苦勞を苦にせぬ男だが比較的苦勞なして濟んで来た、と、目下本縣種畜場の種禽管理を依托され二三十羽の種鶏を飼育しつゝあり、餘生を養鶏と園藝に送るべく計畫しつゝあり。

静永生徵君

阿保町大字阿保
明治二十七年九月八日生

家族 妻まさ子京都市寺町頭西入新柳靈口町石原留姉、長男秀丸、次男憲丸共に小學、三男廣丸

静永君は阿山郡東柘植村大字上柘植の出身にして阿保町安養寺の住職なり、明治四十年京都東山中學校を卒業、宗教大學に入り四十四年三月卒業、大正二年二月安養寺住職となる。同五年三月阿保警察署講師を囑托せられ六年には本山より伊賀擔任布教師に任命伊賀教區々會議員に選ばれる、以來四期間重選され現在に及ぶ、其他名賀郡佛敎團長より民力涵養講師を囑托せられたること三回、現に同團の幹事に就任中。

重藤 久 光君



阿保町大字阿保
明治二十二年一月十八日生
家族 妻昌子上野町山本勝太郎妹、長男久一、次男久、長女美美共ニ小學校在學

重藤家は阿保町の舊家にして醸造家なり
嘉永六年の創業にかゝり銘酒若戎、久正宗の醸造元なり、久光君明治四十年上野中學校を卒業四十三年一年志願兵として歩兵第九聯隊に入營し四十五年三月除隊後累進して少尉となる、大正十一年在郷軍人會阿保分會長となり現在に至る、又上中卒業後（入營中を除く）神戸、比自岐、度會郡二見、の各小學校に本科正教員として奉職し大正五年辭職して家事に従事す又阿保町消防組副組頭に推され大正十四年四月には阿保町學務委員に選舉されて今日に至る、前途ある青年活動家である。

森岡 久 敬君

阿保町大字阿保
明治三十三年七月三十日生
家族 父源吾、母しかの、姉よしを紀伊日高郡龍神村龍神正男妻、きの大津市榎本明治妻、弟久三松阪工校卒業宮川モスリン會

現在に至る、又大字羽根區長に選舉されたる事前後二回あり、性温厚にして衆望あり區民の信任厚し。

住澤 勇 吉君

阿保町大字阿保
元治元年十月六日生
家族 長男龍嫁あい同町岩名諒吉二女、孫育夫小學在學、和夫、久美子、長男龍濱松高工出身大連在住

住澤君は其一生を通じて公共の爲めに捧げたる人なり、明治十八年阿保村戸長役場の筆生として奉職したるを公職の振出しとして二十五年阿保村々會議員、二十八年同村收入役、二十九年助役、三十一年には村長に選ばれ爾來重任して三十九年に至り家事都合にて辭職す、明治四十年迄大字羽根にありて農業に従事せしが四十一年現在の所に移住して商業に従事し荒物雜貨商を開く、大正十二年阿保町學務委員り選ばれ現在に至る、園藝を好み眞言宗を信仰す。

上 津 村

豊生 由 太郎君

上津村大字伊勢地
明治十年三月二十日生
家族 父由藏、母かね、妻ますへ依那古村上郡廣成權右衛門次女、

社在勤、妹ふみ子西宮市本町にて看護婦見習
森岡家は同町森岡千太郎家の分家にして舊燒酎油榨業を營みしを中年廢業し明治四十一年藥種商を開業して現今に至る、久敬君は大正八年大阪藥學專門學校を卒業し歸宅して目下家業に従事しつゝあり、園藝、撞球、野球其他多趣味を有す、日蓮信者なり。

森岡 千 太郎君

阿保町大字阿保
明治四年一月十日生
家族 妻さはへ一志郡境村山田一真長女、長男茂、長女上野町惠美須町小澤源也妻、次女つや上野高女在學、三女せつ子小學

森岡家は布袋屋と號し酒釀造業にして家富む、其創立は明治十六年にして先代孫次郎氏が醬油釀造業より轉業せしものなりと、銘酒龍頭の醸造元にして龍頭は博覽會以下の共進會品評會等に於て賞牌褒狀を受けたること數回ありと。

住澤 馬 太郎君

阿保町大字羽根
明治六年四月六日生
家族 妻壽子、長男孝、次男薫大阪關西石油會社在勤、長女八重子

住澤君本姓中岸神戸村大字比土に生る、豊三郎の三男なり、明治二十六年住澤家に入家其姓を冒す、家政農を業とす、大正二年四月阿保村會議員に選ばれ爾來改選毎に重選され町制施行後は町會議員として

長男慶三、婦養子同村妙樂寺竹島龜太郎長女、孫さみ子、謙三

豊生君農を業として傍ら古物商を營む、明治三十二年歩兵第九聯隊に入營除隊後日露戰役に從軍偉勳多く歩兵曹長に進めらる、凱旋後功により勳七等青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜ふ、蓋し功六級を授けられたる下士は稀れに見る處にして其偉勳窺ふに難からず、歸郷後在郷軍人分會長に擧げられ衆望を蒐む、大正十四年三月同村々會議員に當選して現在に至る、豊生家は舊と豊田姓を名乗り代々庄屋を勤めたる舊家なりしが五代前の主榮次郎の代に領主の感に觸れ免官せられ以來梅屋と稱し旅館を經營せしが當主の代に至りて廢し農業となし今日に至る。

川口 奈 良 吉君

上津村大字伊勢地
明治二十二年十二月六日生
家族 父宇吉、母さめ、妻さめの矢持村奥野上田龜松二女、長男義次小學在學、長女りよ子小學在學、次女きよ子

川口君は農を業とす、同家の祖は東禪寺の住職にして君は其裔なりと、性温厚にして村民間に信任と衆望あり、大正十四年三月選ばれて上津村々會議員となり村治上力を致し前途を囑目されつゝある人なり

竹本熊太郎君

上津村大字妙樂寺
明治十二年四月二十二日生



家族 父善右衛門
母こみな、長男
同、長女たま子
同、谷本久三郎
同、次女みさ
同、神戶村上林福
同、井清生妻

竹本君は現上
津村長なり、
明治四十四年
十月上津村收
入役に擧げら

れ大正三年六月同村助役に當選す、同六年二月辭職し家事に従事す、大正九年五月選ばれて妙樂寺區長となり十年五月上津村々會議員に選ばれ十一年四月辭職し同年六月上津村長に就職して現在に至る、性温厚にして村民の信任あり、明治三十七八年の役に從軍して勳八等に叙せらる。

瀧 倫一君

上津村大字瀧
明治二十六年三月廿九日生

家族 祖母うた、父惣之助、母しよ、妻こまの阿山郡山田村甲野西島鐵次郎長女、長女由紀子、弟敏泰京大工科卒業東京電燈會社横濱支店勤務、弟節三早大在學

瀧君は現上津村助役なり、明治四十四年縣立農林學

校を卒業後大正三年三月迄小學校教員を勤務、大正七年二月上津村農業技術員となり大正十一年四月擧げられて同村助役となる、資性温厚貴公子の風貌あり、村民の信任厚き人なり、園基を好む、父惣之助氏は永く小學教育界に奉職したる人にして現に上津村學務委員を勤務す、名賀小學教育界の元老として尊敬せらる、瀧家は近郷に名ある舊家にして其祖は伊賀亂當時の豪族瀧三河守に發すと傳ふ。

瀧 惣之助君

上津村大字瀧
慶應二年一月七日生



家族 龍倫一君の
項參照

瀧家は近郷に名ある素封家にして又舊家なり、惣之助君永く身を教育界に奉じ兒童教育上功勞顯著なるものあり郡教育界の元老として尊敬せらる三重縣師範學校を卒業して小學教育界に奉じ明治二十九年上津小學校長に任命せられ大正二年辭して田

園生活をなし餘生を樂しむ、此間實に三十餘年間一日の如く兒童教育に力を致し村民子弟より慈父の如く敬せらる、明治三十三年村教育會は之を德として銀牌と銀時計を贈りて表彰し大正二年には金屏風一双を贈呈して其德を彰す、大正十年強ひて村會議員學務委員等に擧げられたるも村會議員は辭して學務委員のみを勤務す、老後の樂しみとして和歌を詠じ秋湖と號す、三重縣農工銀行より山林顧問を囑托せらる。

永井口角太郎君

上津村大字勝地
明治十九年十月八日生

家族 父兼松(六八)妻はつ同字圓舞龜次郎女、長男三龜郎(二二)横濱高工在學、弟嘉平東京高工卒業川北電氣會社技師勤務

永井口君は前に永く上津村々長に擧げられ模範村長として命名ありし人なり、明治四十年三月上津村役場書記を拜命三ヶ月の後同村收入役に擧げられ四十二年六月助役に當選、大正三年五月同村長に當選、大正七年再選、十一年五月退職現に村會議員、學務委員として今尙村治教育の爲めに力を致しつゝある人なり、資性温厚にして識見廣く果斷力あり、其村長たるや稅務教育衛生其他萬般の施設に對し治績悉く擧らざるなく模範村長の名は期せずして郡内に擴

がる、大正九年二月官其德を嘉みし報德表彰規定により模範表彰せり、村民亦君の手腕に深き信頼を拂ひつゝあり。

中森孫次郎君

上津村大字下川原
明治十六年二月十二日生

家族 母さみ子、妻たつ阿保井上秀次郎長女、長女節子、新英男上野町桑町三井鐵松二男、孫賢一、英之助、房枝

中森君は現下川原區長なり、旅館兼料理業を經營す通稱を道入と稱し其本名を呼ぶ者尠し、幼にして大工職を修得し永く其業に従事せしが後現業を經營し建築業は婿英男君に一任す、性豪腹にして俠氣あり選ばれて大字區會議員たる事數回現に其職にあり、又大正十四年十一月大字下川原區長に當選して地方の爲め奔走しつゝある人なり。

山本武雄君

上津村大字伊勢地
明治三十二年三月九日生

家族 母やす、妻名張町本町福喜多重兵衛三女、弟久吉上中卒業上野町惠美須町瀧清太郎氏に養はる、同澄夫上中卒業一年志願兵として在營

山本君、父は漢氏、生前三重縣會議員同參事會員等に選ばれ我縣政の爲め力を致したる地方の元勳なり君は其長男に生る、大正五年上野中學校を卒業後大阪高等工業學校に入學、同八年卒業爾來家事に従事

岩脇君は現種生村助役なり、性豪腹なるも極めて温良村民の信任あり、明治三十七年三月充員召集に應じ歩兵第九聯隊に入隊五月出征軍に従ひ清國孫家咀子に上陸各所の會戦に参加偉功あり凱旋除隊後勳八等功七級金鵄勳章を賜ふ大正二年四月種生村助役に擧げられ同六年一月村長に當選、十年一月滿期退職十二年八月再び同村助役に擧げられ現在に至る。

稲岡 薫 弘君

種生村大字種生 明治二十二年十二月四日生



前途を囑目されつゝある人なり、明治三十七年四月種生村役場書記を拜命、大正元年七月収入役に進められ大正十一年二月助役に推薦され十二年四月選

家族 父米次郎、母たつ子の妻、一子、長男忠夫(一七)上中在學、二男保三(一一)長女子恵子(一二)同字山本光三妻

稲岡君は現種生村々長なり性温厚にして村民の信任厚

ばれて同村長となり現在に至る。

本多 保 郎君

種生村大字老川 明治十五年六月 日生

久左衛門(七二)妻よし(三八)古山村東谷前田文治次女、長男健一、次男康、次女フクエ、次女トク子、三女ジユ子本多君は醫を業とす、上野中學校を卒業後愛知醫學專門學校に入學同校を卒業後母校其他に實地の研究をなし明治三十九年歸郷自宅に開業し傍ら種生矢持兩村醫、博要、矢持、奥鹿野、一志郡境村等の各小學校々醫を囑托せられ現在に至る、性磊落にして社交に長じ村民に尊敬せられつつある人なり。

小川 孝之助君

種生村大字種生 明治五年二月八日生



小川君は現種生神社の社掌

家族 妻くに同村高尾福山利兵衛(三三)長男秀徳(三三)矢持校讀、二男茂徳(二二)縣立師範、三男政科在學、長女瑞枝(二六)同村藤田一夫妻、同字竹ノ矢妻之長女、孫二人

にして縣下小學教育界の元老として尊敬せられつゝある偉勳者なり、明治二十六年四月本縣師範學校を卒業後博要小學校訓導に任せられ翌年四月名賀郡南部高等小學校訓導に榮轉、明治三十年二月阿保校に轉じ同年校長に榮進爾來大正七年十二月迄同校に勤務して兒童教育に貢獻する處多大村民より慈父の如く敬はる其温厚なる性質と熱誠ある教育振りは遂に官廳に達し明治四十五年二月には文部省より旌彰せらるゝに至る、又大正五年五月には帝國教育會より功牌と賞状を受け大正六年十月には奏任官を以て待遇せらる實に三重縣下小學教育者中僅かに四人中の一入なり、其君をして斯く完からしめたるは君の人格の發露に外ならざるも其裏面嚴格なりし父故秀英氏のありし事も大なる一因なり秀英氏は多年同村學務委員として學校の合併兒童の就學獎勵吉田謙好法師遺跡顯祥等について努力したる篤行家にして大正十二年に郡斯民會より十三年には縣斯民會より表彰せられたる人なり、此父にして此子ありと言ふべし。

小川 清 太郎君

種生村大字川上 明治十三年一月十二日生

家族 父清太郎(七二)妻まつ(四六)同字高田利助四女、長女まさ(二八)三女ちよ(一七)新行雄(三〇)孫すみ子(二)

小川君は現薦原小學校校長なり、明治三十八年三重師範學校を卒業三重郡川越小學校に勤務し四十一年同校々長に榮進す、四十三年比奈知小學校長に轉任し大正二年美旗小學校長に大正四年上津小學校長に大正十二年比自岐小學校長に大正十三年現在の薦原校長に轉任今日に至れる人にして常に生徒に勤儉貯蓄を勧め郵便貯金を奨励したる功を認められ大正十三年名古屋逓信局より感謝状を寄せらる性温厚にして良校長として父兄間の信任厚し。

竹ノ 矢九市郎君

種生村大字種生 明治十四年三月二十日生



種生郵便局長なり、本姓は竹森父は九郎右衛門、母はしか其次男にして大字種生に生る、竹ノ矢家に入婚して其姓を冒す、性公共心に富み村民の信任を受く、大正二年四

月選ばれて種生村々會議員となり爾來重選して現在に至る、其他同村學區會議員八ヶ年、消防小頭三ヶ年、養蠶組合長六ヶ年等を勤務して村民の尊敬を受く、大正十二年八月種生郵便局設置と同時に其局長に任命せられ現在に至る。

國分 鑑 宗君

種生村大字老川 明治廿七年五月二十二日

家族 妻なみ、長男宗雄(七)長女昌子(三) 國分君は日本三體の如來尊を奉安する有名なる老川如來極樂寺の住僧なり、縣下鈴鹿郡龜山町字西町に生れ明治三十八年桑名郡長島村花林院深尾童戒師につき得度、明治四十四年名古屋第三中學校に入り大正五年三月同校を卒業し東京曹洞宗大學に學び同年卒業して矢持村奥鹿野久昌寺住職に任せられ大正十二年三月現寺に轉任を命せられ現在に至る、名賀郡佛教團幹事、種生村佛教團評議員等に擧げられ前途を囑目さる現寺に來住以來寺門の興隆に力を致し各地に如來講を組織する計畫を樹て之に奔走中にて大阪のみで七百餘名の講員を得つゝあり。

兵頭 玄 穰君

種生村大字種生 明治八年八月二日生

家族 長男克巳(二)修學中、二男英男(一)長女孝子京都佐伯産

科學校在學

兵頭君は醫を業とす、上野町大字三ノ町に生れ父虎雄氏に伴はれて種生村に住す、明治三十六年大阪慈善病院醫學校を卒業後歸郷して父業を助けて開業種生村々醫同校醫等を囑托せられて現在に至る、性寡慾豪放にして酒を好み書畫骨董を弄ぶ、兵頭家は古くより醫を業とし代々上野町にありて藤堂家に仕へしが明治十五年先代虎雄氏が種生村醫に聘せられ以來此地に住することとなり、君は醫業創業以來十代の孫なりと。

杉森 金 平君

種生村大字老川 明治卅一年十一月十日生

家族 母ひさ(五四)妻みつ(二九)同字奥水家より、長男克巳(八) 二男薫(五)弟隆三(二五)

杉森君は現種生村收入役なり、資性温厚にして磊落村民より信任せらる、大正十四年七月抜かれ種生村收入役に任せられ以つて現在に至る、前途ある青年紳士なり。

矢持 村

富田 伊之助君

矢持村大字諸木 明治卅一年四月十日生

家族 父友次郎(六七)妻ます(二二)長女房子(四)長男高由(二)

東 直 郎君

矢持村大字諸木 明治十二年三月一日生



家族 母もと(七)妻桂子(四)三〇一志郡八知水井家より、長男武(二八)長中在學、長女由紀子(二二)二女光子(三三)二男鎮夫(三三) 東君農を業とし目下一大植林を造成する計畫中なり

富田君は矢持村現收入役なり、大正二年三月矢信信用購買販賣組合書記を拜命、同四年八月退職して矢持村役場書記を拜命、七年十月矢持村收入役代理者を任命せられ八年五月收入役に任せられ爾來就任して現に至る、八年五月矢持村農會幹事を拜命して地方自治産業の發展に力を致しつゝある人なり、性温厚にして村民より前を期待さる。

上田 保太郎君

矢持村大字種生 明治十四年三月二日生

家族 妻すは(四)同字前川重藏二女、長男三雄(二二)母さみ(七)

上田君農を業とす、矢持村の有力者なり、明治四十四年九月矢持村收入役に任せられ四十二年九月退職同四十四年七月衆望の歸する處矢持村々會議員に擧げられ爾來重選して勤続す、大正三年八月矢持村第一區長代理者に重選し同六年一月第一區長に當選、同十月退職す、大正十年三月再び第一區長に選ばれ十一月三月退職す、大正十一年一月矢持村助役に當選、十五年一月任期滿了再選されたるが同年六月退職し七月矢持村實業補習教育委員に推薦され目下就職中、資性温厚にして村民の信任あり。

と、明治三十一年現役志願をなして歩兵第九聯隊に入營六ヶ年間に營特務曹長に昇進して勳七等を授けらる、此間朝鮮、臺灣、樺太等に守備隊として渡航功勞尠からず、性磊落にして寡慾村民の信任あり、明治四十四年歸郷以來在郷軍人分會長、同村學務委員等に擧げられ村治上力を致す處尠からず、村民の信任厚し、亡父九三郎氏又矢持村の長老として村治教育等に力を致したる人なり、同家の祖は桓武天皇の皇子一品葛原親王に出で十三代常縁に至り東中務丞と稱し從五位下たり、代々駿河に住せしが兵太夫吉種に至り伊勢北畠氏に屬し諸木に小城を構へて居したるに初まると。

矢持村 ヒ、セ之部

廣山長太郎君

矢持村大字露生 明治十五年一月二十五日生

家族 長男長生(二三)縣立久居農校卒業、一年志願兵として憲兵の義務修了、長女しづる(一八)名張高女在學、二男長次(一四)妻よしの(三三)一志郡八知村大西乙松長女、二女郁子(二二)

廣山君農を業とす、父は長藏、母はりる其長男に生る、矢持村の有力者なり、明治三十五年大字區長に當選して信任を蒙る爾來村會議員、學務委員に歴任、大正八年九月には衆望の歸する處名賀郡會議員に當選大正十年郡參事會員に當選す、又明治三十年組合令制定以前に矢持信用組合を組織し之が經營の任に當り後之を併合して矢生信用組合とし其專務理事に就任同組合の基礎を作り今日あらしめたる外學校の新築道路の改修等に力を致して功あり、地方の功勞者として認めらる。

關田義臣君

矢持村大字奥鹿野 明治十五年五月十九日生

家族 妻うの(四三)長男義孝(一八)上中卒業後師範校在學、二女ふみ(一四)阿山高女在學

關田君本姓奥永、父は祐平、母はとみ其二男にして種生村大字老川に生る、關田家に入婿して其姓を冒す、現矢持村長なり、君資性潑瀾事に當りて熱心、苟しくも計畫したる事は成さざれば止まざる勇氣と



三七二

選ばれて矢持村々會議員名賀郡々會議員となり次いで矢持村々長に當選す、爾來三期現に其職にあり其他矢持村農會長、矢生信用組合理事、三重縣山林會議員、三重縣農會議員、三重農民俱樂部名賀郡委員、所得稅調查委員再選、名賀郡畜産組合長、同山林會長、同搾乳組合長、三重縣農會評議員等に現任し地方改發に力を致しつゝあり、君亦敬神崇祖の念厚く大字奥鹿野鎮守神八柱神社は君の祖先が之を勸請して土産神となせる關係上之が獨立について百方奔走して基本金の造成拜幣兩殿の新築等をなし又其菩提寺の維持についても區民を督して一寺の體面を維持せしむる外村治上に對しては特に道路の改修小學校の新築勤儉貯蓄の獎勵等をなし治績悉く擧らざるなく其功績顯著なるものあり遂に本縣知事より模範村長として表彰さる蓋し當然の賜と言ふべきなり

實力を有する快男子なり、初矢持村收入役に就任し續いて同村助役に進み其手腕才幹を認められ村民の信任日に厚く遂に

他郡市在住者ノ部

矢持村 七、七、七

廣山長太郎君

矢持村大字寓生 明治十五年一月二十五日生

家 族 長男長生、三子、縣立大野農校卒業、一年志願兵として應召の
入隊終了、長女、(一八)名、高女在學、二男長次、(一四)
次、(一三)志願兵八日村大野乙松長女、二女郁子、(一)
廣山君農を業とす、父は長藏、母は、其長男に生
る、矢持村の有力者なり、明治三十五年大字區長に
當選して信任を、爾來村會議員、學務委員に歴任、
大正八年九月には衆望の歸する處名賀郡會議員に當
選大正十年郡參事會議員に當選す、又明治三十年組合
令制定以前に矢持信用組合を組織し之が經營の任に
當り後之を併合して矢生信用組合とし其專務理事に
就任同組合の基礎を作り今日おらしめたる外學校の
新築道路の改修等に力を致して功あり、地方の功勞
者として認めらる。

關田 義 臣君

矢持村大字奥野 明治十五年五月十九日生

家 族 長男の三、四三長男義孝、(一八)上中卒業後師範校在學、二女
ふみ子、(一四)阿山高女在學

關田君本姓奥永、父は祐平、母はとみ其二男にして
種生村大字老川に生る、關田家に入婚して其姓を冒
す、現矢持村長なり、君資性潑濶事に當りて熱心、
苟しくも計畫したる事は成さざれば止まざる勇氣と



三七二

運はれて矢持村々會議員名賀郡々會議員となり次いで
矢持村々長に當選す、爾來三期現に其職にあり其
他矢持村農會長、矢生信用組合理事、三重縣山林會
議員、三重縣農會議員、三重縣民俱樂部名賀郡委
員、所得稅調查委員再選、名賀郡畜産組合長、同山
林會長、同搾乳組合長、三重縣農會評議員等に現任
し地方改發に力を致しつ、あり、君亦敬神崇祖の念
厚く大字奥野鎮守神八柱神社は君の祖先が之を勸
請して土産神となせる關係上之が獨立について百方
奔走して基本金の造成拜幣開殿の新築等をなし又其
菩提寺の維持についても區民を督して一寺の體面を
維持せしむる外村治上に對しては特に道路の改修小
學校の新築勤儉貯蓄の奨励等をなし治績悉く舉らざ
るなく其功績顯著なるものあり遂に本縣知事より模
範村長として表彰さる蓋し當然の賜と言ふべきなり

實力を有する
快男子なり、
初矢持村收入
役に就任し積
いて同村助役
に進み其手腕
才幹を認めら
れ村長の信任
日に厚く遂に

他郡市在住者ノ部

品三丹仁 物名本日

●最良の体温計は家庭の名醫

仁丹の体温計

北里、金杉、高松、吉武四博士顧問
侍醫頭入澤博士外廿博士實驗推奨

四博士創製
科學的優秀
高貴料配合

齒學界の權威

仁丹のハミガキ

丸罐入は別製せる優良品
にして清涼味特に強
く口中殊に氣持よし。

四博士責任制
ホケット必携

なる中藥
完全なる
懷中藥

金會 正直ニ考へ眞實ヲ以テ
行へ、フランクラン

顧問 醫學博士 西澤博士 長井長義先生
監督 大坂海軍校長 醫學博士 大槻 式 先生
協同 日本齒科會會長 醫學博士 高島多米治先生
處方 日本齒科會理事 醫學博士 二村領次郎先生



JINTAN'S MEDICINAL TOOTH POWDER
仁丹の藥齒磨
仁丹本舖製
MADE IN JAPAN

丸罐 十三美 實物大

他都市在住者

三重縣下

橋井 政 吉君

家族 妻しげ子小田村橋本宗七三女
橋井君、父は源七、母はくまの其二男にして上野町大字中町に生る、幼にして明敏常に級中の首席を占め俊爽の名を冠せらる、然れども家政豊かならざる爲め中等學校に入るを許さざる状態にあり、時の郡長八百信夫氏に見出され其後援を受けて縣立第一中學校に入學常に特待生として優遇せらる、中學四年のとき病を得て中途退學をなし歸郷自宅に静養す、病氣全快後三重郡書記を拜命して其才能を認められ後抜かれて三重縣屬となり累進して大正六年理事官に任せらる、爾來三重縣地方課に勤務地方課長に進められ現に高等官五等從六位勳六等たり、資性温良

誠に得難き事務官とし廳内上下の信任を集めつゝ、ある人なり、人いつて立志傳中の人とすべきなり。

貝増滿壽 吉君



生る、幼にして明敏、群童の模範となる、明治三十八年三重縣立第一中學校を卒業後進んで第三高等學校より京都帝國大學法科に入學大正元年同大學卒業後岐阜市大道寺慶男の許にありて辯護士に従事し一ケ年の後津市に來りて獨立開業して現今に至る、君性仁俠心ありかつ孝心深し、其學にあるや家兄家産を蕩儘して餘す處なし、君母を伴ひ刻苦勉勵克く業を終へて母を慰む其業務に専むや常に親切人を動かさざれば止まざるの氣概あり、同情すべき犯人或は

津市大字丸之内
明治十七年六月廿六日生

家族 妻しげ子京都市東區柳原三郎長女、長女しげ子、四女高女在學、壽子(一)

貝増君、父は爲作、母はまさ其次男にして名賀郡名張町大字柳原に

本日の特産品 三井

仁丹の威力計

完全なる中薬

仁丹ハミ

九歳入は別製せる

誠を得難き事務官とし廳内上下の信任を集めつゝ、あ
る人なり、人以つて立志傳中の人とすべきなり。

他郡市在住者

三重縣下

橋井政吉君

家族 妻しげ子小田村橋本宗七二女

津市大字熊澤町 明治十年八月一日生

橋井君、父は源七、母はくまの其二男にして上野町大字中町に生る、幼にして明敏常に級中の首席を占め俊爽の名を冠せらる、然れども家政豊かならざる爲め中等學校に入るを許さざる状態にあり、時の郡長八百信夫氏に見出され其後援を受けて縣立第一中學校に入學常に特待生として優遇せらる、中學四年のとき病を得て中途退學をなし歸郷自宅に静養す、病氣全快後三重郡書記を拜命して其才能を認められ後抜かれて三重縣屬となり累進して大正六年理事官に任せらる、爾來三重縣地方課に勤務地方課長に進められ現に高等官五等從六位勳六等たり、資性温良

ハ、カ之部

貝増滿壽吉君

津市大字丸之内 明治十七年六月廿六日生



家族 妻しげ子京都市鉄屋町字川盛三郎長女、長女治子(四)津高女在學、壽子(二)

貝増君、父は爲作、母はまさ其次男にして名賀郡名張町大字柳原に生る、幼にして明敏、群童の模範となる、明治三十八年三重縣立第一中學校を卒業後進んで第三高等學校より京都帝國大學法科に入學大正元年同大學卒業後岐阜市大道寺慶男の許にありて辯護士に従事し一ケ年の後津市に來りて獨立開業して現今に至る、君性仁俠心ありかつ孝心深し、其學にあるや家兄家産を蕩儘して餘す處なし、君母を伴ひ刻苦勉勵克く業を終へて母を慰む其業務に望むや常に親切人を動かさざれば止まざるの氣慨あり、同情すべき犯人或は

三七三

正義の貧困者に對しては無報酬にて辯護の依頼に應じつゝあり、故に信任厚く來請者門前市をなすの盛況にあり、衆望の歸する處安濃津辯護士會副會長に擧げられ其人格識見を認められ大正十五年四月遂に會長に當選す、又培審法喧傳普及委員を司法省より囑托せられ現在に至る、前途幾春秋幾多期待すべき人なり、玉突と寫眞を好む。

竹澤金五郎君

津市大字塔世西裏
明治十五年九月二十二日生



家族 妻つた子府
中村佐那具松井
久七長女、二男
金久(六)長女、三男
惠(八)二女、四男
喜美子(八)五女
須美子(四)

田村竹澤新吉君の弟に生る、現陸軍歩兵中佐にして津聯隊區司令部員なり、明治三十五年縣立第一中學校を卒業同年十二月士官候補生として歩兵第三十七

聯隊に入營三十六年十一月士官學校を卒業して歩兵小尉に任官せられ歩兵第三十七聯隊附を命ぜらる、三十八年八月新設歩兵第六十一聯隊附を命ぜられ同月十八日大阪出發出征の途につきしも平和克復の爲め滿洲守備隊として同地駐屯四十年四月内地歸還を命ぜられ濱寺飯營舎に勤務、四十二年三月和歌山歩兵第六十一聯隊に歸還十二月中尉に任官せらる、大正三年八月大尉に進められ中隊長となる、大正五年四月新設朝鮮歩兵第七十八聯隊中隊長を命ぜられ和歌山より一ヶ中隊を引率して渡鮮、八年四月西伯利亞出征野戰交通部附を命ぜられハルビンに駐在同年九月北滿洲長春停車場司令部に任命せらる、後官制改正により關東軍司令部附となり長春平坦司令部附を命ぜらる、十年一月再び歩兵第七十八聯隊附を命ぜられ歸鮮す、十一年二月少佐に進められ歩兵第九聯隊附となり聯隊副官、同大隊長を得て大正十五年三月中佐に進み津聯隊區司令部員を命ぜられ現在に至る、此間功により正六位勳四等旭日小授章を賜ふに足る、村民其功勞忘し難く毎年法要を営みて其靈を祭れり。

ひ大正四年乃至九年の戦功により金千二百五十圓を賜ふ。

福永久次郎君

津市大字号之町
明治二十一年七月十六日生
家族 妻つた(三四)阿山郡花ノ木村法花兼本金之助長女、長男重治(一四)次男重一(一六)三男三郎

福永君、父は重五郎、母ここのめ其長男にして阿山郡島ヶ原村に生る、明治三十九年三月縣立第三中學校を卒業し四十一年十二月一年志願兵として歩兵第九聯隊に入營歸隊後四十四年豫備歩兵少尉に任官さる、明治四十三年在郷軍人會島ヶ原分會長に任せられ同時に阿山郡聯合分會評議員等に任せらる、大正四年上野町忍町東海製糸株式會社の株式を同族の手に集め其常務取締役に任命せられ大正十一年四月同社を關西製糸株式會社に合併其常務取締役となり津市に住して現在に至る、資性温厚にして衆望と信任を得たる前途有意の青年實業家として期待されつゝある人なり、父の重五郎氏又地方には珍しき大事業家にして經營難に遭遇せる東海製糸會社を冒險的に經營して名をなしたる人なり、同家は舊藤堂藩の御供無足人にして地方の舊家なり。

澤元一君

津市大字熊澤町
明治十五年三月十一日生
家族 妻和子滋賀縣堅田町村上昌弘長女、長女智恵子(一一)

澤君、父は重治郎、母はノへ其二男にして阿山郡壬生野村大字川東に生る、初め朝鮮元山居留團廳書記を拜命せるが後辭して歸郷、大正元年阿山郡書記を拜命累進して勸業主任となり大正十三年九月には抜かれて多氣郡長となり大正十五年六月郡役所廢止と同時に廢官七月地方事務官に任せられ三重縣地方課に勤務し功により從七位に叙せられ現在に至る、資性温厚社交に長じ不言の間に實行を好むの士なり君の父重次郎氏は生前縣會議員、郡會議員其他の公名譽職に就任し居村の灌漑用水乏しきを歎じ多くの私財を投じ村民を督勵して田代池、新池を始め其他數ヶ所に用水池を新設し又修築池七ヶ所に及び同村の旱害を一掃したる外堤防道路の改修、學校の新築等至らざるなく地方の有名なる功勞者として其名近郷に高く村民慈父の如く尊敬す、官其行を嘉みし遂に藍授褒章並に御紋章附羽織を下して其徳を賞す、大正七年五月三十一日友人と碁を圍みて言へらく「僕は明日此世を去る」と稱して煙に巻きしが翌日六月一日眠るが如く逝去すと、以つて其人となりを窺

森 篤三郎君

四日市警署警察官會
明治十二年十一月三日生

家族 妻よし子、
長男榮(二)縣
立松阪工校卒業
三重度量衡檢定
所勤務



森君は上野町
農人町の出身
にして現四日
市警察署長な
り、本姓奥田
父は吉次郎、

母はつる其三男にして上野町小玉町に生れ森家に入
婿して其姓を冒す、明治三十八年三重縣巡查を拜命
神戸警察署勤務を命せられ三ヶ月の後刑事特務に振
擢さる、四十三年名張署に轉任同年七月更に四日市
署へ移り四十五年三月津署高等刑事に榮轉越へて大
正元年巡查部長に進み縣保安課別室(高等課)に勤務
後宇治山田署に轉じ大正四年の御大典と衆議院議員
總選舉に當り其重任を完ふす、後一旦警察界を退く
事となる時の縣知事馬淵銳太郎氏君の特別の勤勞に
酬ゆる爲め村正の短刀一振を與へて其勞を慰す、後

三ヶ年再び巡查部長を拜命高等課勤務を命せられ大
正八年阿保警察署長に轉じ九年七月刑事課新設と同
時に其主任に選拔さる、後大正十二年三月大泉原署
長より十三年十月桑名署長に大正十五年一月松坂警
察署長に榮轉昭和二年一月地方警視に昇進して四日
市署勤務を命せられ今日に至る、資性活潑にして豪
毅部下を愛する事我子の如く實に當代稀れに見るの
良警察官と云ふべきなり。

東京市及市外

堀井卯之助君

東京市麻布區三軒家町五〇
明治四年四月十九日

家族 妻さき子東
京芝區金杉町三
菅田佐太郎二女



堀井君、父は
善造、母はみ
つ其長男にし
て上野町萬町
に生る、堀井
家は舊と相應
の材木商なり

しが祖父の代に衰落して窮迫の極にあり、父善造氏
に至り些かなる藥種商を營みしも昔日の影なく僅か
に一家口を糊するに過ぎず、此間に生れたる君は漸
くにして小學校の課程を終へ年十四才のとき東部小
學校雇教師に採用せられ一ヶ月一圓五十錢を給せら
る、家貧にして中等學校に入るの資なければ傍ら獨
學自修す、時に上野町に郡立中學校の設置されたる
より父に請ふて入學せんとしたるも貧商の子弟が中
學校處かど苦もなく退けられたるも屈せず母に乞ひ
親族に哀願して漸く許され入學す、在學二年常に級
中山本恒郎、菊本直次郎、立入春太郎諸氏と雁行し
て首席を占む、後同校の廢せらるゝに會し津中學校
に入らざるべからざるも家貧にして學費なく百方哀
願の結果漸く月三圓の學費給與を許されて津に遊學
す、修學二年偶々費用節減の議起り津中學校は大學
出身の高級教諭を廢し代ふる高等師範出身者を以つ
てせんとする案が縣會に提出さる、學徒之を見て大
いに憤慨君の如きは率先して反對し縣會議員を歴訪
して其不當を鳴らしたるも容れられず、時の校長津
田純一氏等と相謀り同盟休校をなし新に四州學校を
設立せらるゝに及んで之に轉校したるも收支償す間

もなく閉校さる當時君は何等學費に對する考もなく
直ちに上京す、時に明治二十二年始めて國會の召集
さるあり總舉に會し尾崎行雄氏を助けて政治運動を
なす、後生活の道を得る爲め或時は著述をなし或時
は牛乳の配達より玄關番に迄零落しあらゆる辛酸を
嘗め明治二十四年時事新報社に入社す、當時同社編
輯局員は何れも慶應義塾出身の青年紳士のみなりし
が君は特に用ひられて他方電報翻譯係に採用され遂
に社長福澤氏直轄の社員に遇せらる、明治二十四年
印度孟買視察を命せられ約四月にして歸朝、二十七
八年日清戰役には撰ばれ從軍記者となり出征、平和
克復後珍田上海總領事と共に支那視察を命せられ歸
朝後同社政治部長に登用せらる、明治三十一年大阪
時事新報支局長に任じ翌年本社編輯長に累進す、明
治三十四年聘せられて東京興信所理事となり大正四
年千代田生命保險相互會社理事に招聘後選ばれて取
締役となりて現在に至る、其經歷は全く奮闘の二字
を以つて盡さる、十年一日の如き君の努力は誠に世
上に傳へて範とすべきものあり、又以つて現代の偉
者とすべきなり。

堀川 美哉君

東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町原宿
明治十六年五月十七日生



家族 妻 磯 瑛 名 張
町 柳 原 森 内 美 徳
長 女 宮 美 共 子 府
立 弟 三 高 美 共 子 府
合 弟 保 郎 早 大 卒
業 米 國 一 一 一 大
學 在 學

堀川君は名賀郡比奈知村大字瀧原の出身で伊賀出身東

京在住者中に人格政治家として尊敬を蒐めて居る人である、東京早稲田大學文科を卒業後コロンビヤ大學ロンドン大學等に學び大正六年五月衆議院議員總選舉に立候補し大多數を以つて當選し前途を囑目された人であるが其後衆議院議員の補員選舉に同志に推され一度立候したるも不幸強敵現選信參與宮川崎克氏の爲めに破られ現在は東京中外商業新聞主筆として言論機關に身を寄せ常に君獨特の經濟學論に中外商業紙面を賑はしてゐる、要するに君は現代稀れに見る人格者政治家であつて常に政争と私交とを混ぜざる高潔な士である、此點

から某者は君を現在の泥れる政界に送ることは不適任なりと稱する者すらある以つて其人となりを窺ふに難くない、此人格政治家の君は伊賀に於ける舊國民黨係の主領として牛耳を握れる人であるが秋まだ利あらず静かに雌伏して捲土重來の期を待つてゐる要する君の如き高潔な人格者を政界に出すことも亦伊賀人の誇りである云はねばならぬ、性信仰心に富み又後進者の誘導に常に懇ろなる教を垂れつゝあつて在京伊賀人に尊敬されてゐる。

藤堂 高成君

東京府下葉町
慶應三年二月十二日生

家族 妻 いく子(四五)外に一男一女あり

男爵藤堂君本姓は竹内、京都市竹内子爵家に生る、長じて藤堂家に入婿して其姓を冒す、初めの名は憲九家督して高成と改む、藤堂家は舊名張藩主藤堂宮内少輔高吉の末孫にして君は其十二代なり、藤堂家は封土奉還後家政豊かならず加ふるに授爵の恩命に接せず一時は舊一万五千石の大名の影を止めざる迄に零落せり、君入家後其家名の挽回に焦慮せるも機到らず、小學校代用教員を奉職して僅かに家計を樹つ、後名張藤堂家の祖先の偉功天聽に達すると同時

に其宗家たる藤堂伯爵家又其家名を起すことになり遂に男爵を授けらる後上京巢鴨町に住す、大正六年選ばれて男爵互選貴族院議員となる、資性温厚下情に通じ郷土の爲め盡力奔走することを樂みとし其貴族院議員在職中は特に郷土の爲め力を致したる人にして舊領民より父師の如く尊敬せらる、蓋し幼時種々の辛酸を嘗めたる結果下民情に通ずるが爲めなり所謂世の大名華族と其軌を同ふせざる又故なきに非ず、現に正五位勳五等たり。

乙竹 岩造君

東京市小石川區大塚窪町
明治八年九月二十九日

家族 父 數 男 (七七) 母 ち ち (七三) 妻 あ い (三九) 長 女 淑 子 (一九) 長 男 誠 (一七) 二 女 數 子 (一五)

乙竹君は阿山郡上野町大字萬町に生る、父數男君は舊藤堂藩士なり、其の家祿元來豊かならず、維新の政變後家道甚だ振はざりしが母堂太刀恵子刀自は比類稀なる賢婦人にして貧苦の中に夫を助け七人の子女を教養す、斯かる賢母の薰陶を享けたる君なるを以て自ら堅忍の志操と確乎たる精神とを具へ小學時代は勿論中學時代に於ても俊爽の名は全校を壓せり明治二十七年三重縣尋常中學校を卒業し高等中學校に入らんとせしも當時君が家道尤も窮乏を極め殊に

兄弟多き中なるを以つて君のみ専ら學に勤めを許さざる事情に遇ふ、乃ち教育家となりて人を教へつゝ自ら修養を積まんと欲し高等師範學校に入學せり其の在學中の成績は蓋し同校に於て開設以來無比の優等にして入學より卒業に至るまで一回も首席を他に譲りしこと無く彼の明治三十二年中央新聞がその一千號祝に全國官立學校の最優等者を掲出せるや君即ち同校の第一名として表出せられ斯くて同年卒業するや直に同校助教諭兼訓導に任せられ同附屬中小學校の教育に功績少なからず、殊に他の卒業生の及ばざる點は卒業後も研學を廢せず就中先づ力を外國語の研究に注ぎ英語は勿論從來と雖も優等なりし上に外國語學校獨語別科を卒業し更に佛語科を研究せり此の間二弟を郷里より呼び迎へ僅少なる俸給を割きて二弟の學費を辨じ三人首を鳩めて苦學を相扶け更に一弟一妹を加へて兄弟五人自炊生活に學業を勵みしが如き實に他生の龜鑑たるものなり、君資性快活にして質朴毫も邊幅を修飾せず殊に頭腦明晰にして處務の才あると數個の外國語に鍊達せるとは尤も同人間に贊稱せらるゝ所たり。
明治三十四年文部省に修身教科書編纂の事業始まる

や君は擧げられてその編纂起草委員となり、修身教科書調査會長、故男爵加藤弘之博士の下に盡瘁すること三箇年、其の事業終るや直に東京高等師範學校教授に任せられ教育學研究の爲獨、英、米三國に留學を命せられ乃ち先づ獨逸國に赴き柏林大學に入りドイツ、ジムメル、パウエル、ミュンヒ等諸教授の指導を受けて哲學、教育學等を研讀し又廣く歐米各國を視察巡歴して明治三十八年歸朝し直に文部省視學官に任せられ東京高等師範學校教授を兼ね尋いで高師教授専任となり以て今に至る、其の間東京美術學校、國學院大學、東洋大學等の講師となり又文部省教員檢定委員會委員、國定教科書調査委員會委員、東京高等師範學校評議委員等として功績頗る多く從四位勳四等にして大正二年以來勅任待遇を受く、君著書甚だ多く孰れも廣く世に行はれて教育界に裨益を與ふること極めて大なり。

大森 洪 太君

東京市本郷區西片町十
 大森君は青年司法官中聲望ある人なり、阿山郡阿波村に生る、三重縣立第三中學校を卒業後第一高等學校に入り後進んで東京帝國大學法科に入學明治四十

五年同校卒業、大正元年司法官試補に任せられ大正三年東京地方裁判所判事に任せらる、大正七年同裁判所部長に任じ大正八年司法省參事官に任せらる、大正九年平和條約實施準備の爲め支那に出張を命せられ大正十年國家試験委員に任せらる、大正十一年混合仲裁裁判所日本政府代理人として倫敦に駐在、大正十四年混合仲裁裁判所審判員として同じく倫敦駐在を命せらる、大正十五年末混合仲裁裁判所任務終了と共に歸朝、司法書記官兼國家試験委員に任せられ現在に至る、幼にして明敏俊才の聞へ高く前途幾春秋、多き期待を有せらる偉材なり。

岡島 新太郎君



東京市日本橋區橫山町二ノ一二
 明治六年十月五日生
 家族 妻子四人、
 外ニ店員七名
 岡島君、父は喜八郎阿山郡輛田村大字小杉に生る、君は其三男である生後僅かに十ヶ月にして

父を喪ひ母の手に董育さる、明治十一年より靜海性享、横井瑛天兩師について和漢の學を學び成績優秀の簾を以つて阿拜山田郡役所より賞を受くること六回に及ぶ、年十八才のとき他家に養子したが生來の剛情者として辛棒の出來そうな筈なく幾何もなく離縁となる 其後再び他家に縁付いたが再び離縁さる於茲決する處あり養家の金十圓を懐中して的もなく草津線深川驛より草津に下車し大阪に行かんか東京に行かんかと思案の末東京に行く事に決心し翌朝六時と言ふに新橋驛に着いたもの、元より行先のあらう筈がない、

車夫の勸むるまゝに車上の人となり柄にもない淺草へでもと洒落た、車夫は途中の名所を二々親切に説明して呉れるが元より耳に這入らない、遂に意を決し上京の仔細を車夫に語つた處私も三重縣人だと遽かに親切にして呉れ懇意な處へ案内してくれた、其家の主人は非常な親切者で家出の不心得を悟し歸國を勸めたが一度決心した事であるからそれを聞かず口入屋の周旋で洗張屋の職工となつた、朝の七時(冬の七時)から夜の八時まで糊炊き、水吸み、横槌で絹打ち等を休む間もなくやらされる、百姓を見限つた

者に百姓の戀しい筈はないが其日々々の激勞が骨身にコタへ此處位なら東京に來るでなかつたと幾夜人知れず泣いたか判らなかつた、遂にそこに居堪らず家出して他に奉公口を尋ねた時に懐中僅かに十錢生來の剛情者も心細い事限りなしであつた、

そして再度の奉公を艾屋に求めた、根が田舎者の悲しさ毎日倉の中で艾晒しをするのが役目であるが前の處よりは仕事が樂なので此處で一辛棒しやうと主人大切に働いたが不幸脚氣病の爲め歸國せなければならぬ事になつた、

歸國して療養五ヶ月全く全治したので再び上京することとなり艾屋に再度の奉公を續くることとなつた後日店が縫針問屋を始めたとき同店員中に分數算を知る者なく、君は之をなして主人に認められたのが立身の端緒となつた、それから君は艾晒しから店員に上り縫針の行商をすることとなり勤直に奉公したので、主人の感賞一方ならず遂に主妹の婚養子に懇請された、再度まで辭したが實兄迄が中に這入つての勸めに止むなく承諾はしたもの、僅か四ヶ月で失敗し明治三十七年懐中僅かに八十圓で糸物問屋を思ひ付き内二十圓で箱車、脚絆、足袋、提灯等を購ひ

日本橋區横山町三丁目岡島新盛堂の看板を掲げ開店し夜を日に次いで苦闘した功空しからず三年後には馬喰町三丁目に移轉し別に石鹼製造業を兼營して成功し漸く世に知らるゝに至つた人で君の半生は全くの苦闘史で彩られてゐる、現在東京化粧品日出株式會社取締役社長、神奈川縣久良岐郡久保土地開拓組合長を始め幾多の會社重役組合議員等を勤めてゐる、近頃稀れに見る成功者である。

川崎 克君

東京府荏原郡大崎町白金嶺町九四
明治十三年十二月二十八日生



家族 母すへ、妻 康子、愛媛縣越智郡日吉村土族佐久間信義二女、長男勉第一高等學校文科在學、二男秀二東京芝中學在學

新進の政治家 前途ある國民の代表者として其名聲を天

下に駆せた川崎君を我伊賀から出した事は尠くとも伊賀國民の名譽であり幸福であると言はねばならぬ 明治十三年上野町大字車阪の一貧家に生れ土地の小

學校を卒業して八十三銀行に入り傍ら刻苦勉學す若年より議論を好み負け惜みの強い事に於いて同僚に持て餘まされた人である、又特に政治を好み口角泡を飛ばして時事を論じ好んで演說會等に出席して其抱負を批歴する等衆に異なる處が多かつた、偶々愕堂尾崎行雄氏の伊賀遊説に會し其前衛を承り熱辯を振ふに及び見出されて其學撲となりて上京するや天稟の伶俐は事毎に其才能を發揮して尾崎氏に賞せらる、明治三十四年三月遂に日本大學を卒業し後外國語學校に入り佛語を専攻し世に出て、東京市吏員に就職せしも負けず嫌ひの性質は屬吏として長く續く筈なく間もなく辭して日本新聞記者となる、明治四十年九月渡鮮して元山時事新報主幹となり同年十二月同地居留民團長に擧げられ、就任するや克く後進者を導き同胞の福利を増進し帝國の權威を確立する等治績大いに上り居留民から慈母の如く慕はれ信任日に高きものがあつた、後辭して歸國し大正四年五月衆議院議員の總選舉に三重縣より立候補し當選して代議士となり以來重選すること四回現に三重縣第十區選出衆議院議員として中央政界に其名聲を博してゐる、又大正十三年八

月には抜かれ陸軍參與官に任せられ更に十四年八月遞信參與官となりて現在に至り正五位勳三等の榮位に叙せられた、

思ふに君の如く生を一貧家に受け獨立獨歩奮勵努力して今日の地位をかち得た如きは天下稀れに見る處であつて眞に立志傳中の人として推獎するに憚らざる者である、性極めて廉潔にして職を瀆りて私腹を肥す現代者流の政治家と同日に論すべきでない、殊に其愛郷心に富める事は郷黨の誘導、地方の福利の増進等に寢食を忘れて奔走することに據つて証明されて居る、號を克堂と稱し書に巧みにして又陶器を愛す殊に伊賀焼の鑑識については名人の妙を得と言ふ、曩きに古伊賀復興會を起し自ら其會長となり郷土製品の眞價を世に紹介したる如きも亦愛郷心の發露であることを證する一である、其他君が伊賀地方の爲め致したる努力と功績は實に枚擧に遑なしと言つてよい、兎に角君の如き偉材を出した事は伊賀の誇りとするに足ると言つて敢へて過賞ではない。

吉住 福松君

東京市麹區九段坂下
明治十一年二月二十五日生

家族 妻はる(五〇)長男太郎(二九)長女豊子(二四)二女静子(一六)

吉住君は名賀郡古山村大字安場の出身なり、婦人手藝材料小笠原熨斗折方標本造花書籍業を營み大成功をなせる人なり、中年まで郷里古山村にありて村會議員、郡會議員等に擧げられ居村の爲め力を致しつゝ、ありしが感ずる處あり明治三十八年東京に出で造花材料の販賣に従事し遂に今日の大成をなす、商業に何等の經驗を有せざる君が中年より出で、彼大成をなせる反面には天稟の發明と時代趨勢を達觀する明晰なる頭腦がありし事は忘るべからざるも亦一面には小成に安せざる不斷の努力が之を成さしめたりと云ふべし、性公共心に富み諸種の公共事業に寄附を惜まず郷黨其人となりを賞しつゝあり。

高久 甚之助君

東京市外中野區三二七九
明治十九年二月九日生

家族 妻まさ(三六)府中村佐那具町野橋吉三女、長男慶一(一七)長女ひさ子(一一)外に弟芳郎(三〇)の妻あり

高久君父は甚助母はかめの其二男にして小田村に生る明治四十一年三月東京外國語學校を卒業し直ちに帝國鐵道廳に入り爾來引續き鐵道省に獨立後も奉職して現今に至る、此間常に學業を廢せず獨學自修して大正六年十一月には高等文官試驗に合格し大正十年八月には抜かれて鐵道省より歐米留學を命せら

る米國フイラデルフィヤ、ペンシルヴェニア大學大學院に於いて交通學を専攻しマスター・オヴ・ビズネス・アドミニストレーションの學位を受け大正十三年三月歸朝す、現に君は鐵道書記官として奉職しつゝあるが特に外國の事情に通じ爾來選ばれて北京莫斯科、伯林等に開かれたる國際聯絡運輸會議に出席して功あり、前途を矚目されつゝある人なり、君性仁俠に富み伊賀出身の後進學生を勞り其誘導に盡す處不尠同郷人間に尊敬せらるゝ亦以つて苦學力行の人として推賞するに足るべき人なり。

竹島 茂 郎君

東京市外濠野川町字中野三四一
明治八年四月三日生

家族 妻かれよ上野町菊山喜藏女、長男卓(二四)東京帝大文科在學
長女かす(二二)御茶水高女卒業、次女ふみ(一八)全上、二男嘉郎(一一)

竹島君は伊賀出身教育者中乙竹岩造氏と並び稱せらるゝ人である、常に伊賀出身の學生徒弟を勞はり在京伊賀人より慈母の如く敬はれてゐる、
阿山郡花ノ木村大字大野木の出身で明治二十九年三月三重縣師範學校を卒業し東京師範學校に入學、明治三十五年三月同校卒業、後静岡縣榛原中學校教諭を拜命し翌年四月東京女子高等師範學校教諭に任せ

られ今日に至れる人にして現に従五位勳四等の高位を授けられ勅任官を以つて待遇せられてゐる、
君亦稀れに見るの良教育家にしてかつては率先して伊賀學友會を組織し伊山寮を樹て伊賀出身の學生等に便宜を與へ常に之を教へて善良なる子弟を出す事に力を致して居る、伊賀出身の在京人並に伊賀出身の學生が比較的社會的に重視せられつゝあるは實に君の力預つて大なりと言つて過言でない、
斯くの如く同郷人を勞るに特に懇ろなる點は他の遠く及ばざる處で君の如き良教育家を出ししかも之を東都に有するを得る伊賀の學生並に其父兄は誠に有難き幸福と言ふべきである。

蘭川 武君

東京府荏原郡大井町出石五一四二
明治八年十一月一日生

家族 妻喜久子

蘭川君は辯理士を業とし事務所を東京市麴區丸之内仲通り三菱仲二號館四階に置き東京特許代理局と名づく、電話は事務所大手五〇五二番、自宅大森一四八八番なり、阿山郡河合村大字圓徳院の産生にして伊賀出身成功者の一人に數へらるゝ、明治三十二年東京高等工業學校機械科を卒業し内務省、農商務省等に奉職せしも官吏生活をなす事が自己の性格に適せ

ざるを悟り辭して東京機械製造株式會社に入りしも之又自己の理想を裏切る事多く結局退社することとなり、現在の辯理士となり漸く世に認められ遂に大東京市に於ける同業者中指を屈せらるゝ事となる、
性公共に富みかつ後進者の誘導に興味を有する爲め後輩より師慕せらるゝ事慈母の如し、殊に事に當りて懇切叮嚀を旨とし實質を本位とする爲め諸會社より來りて指導を乞ふもの日に多く顧問相談役となりたる會社多し、總ての肩書を列記するにせば葉書大の名刺を要する爲め未だ曾て肩書を用ひたる事なしと、常に語りて曰、若年國を出でし爲め郷黨の爲め未だ何等爲す處なきは遺憾の極みなりと、以て其人となりを窺ふべきなり又平素子弟の教養に意を用ひ忙中筆を執ることあり、應用機械學、工業概論等は君の著になるものにして後進者に資する處尠からず、餘暇日本音樂を樂しむ至誠を信條として形式的宗教を執らずと。

村井 四 郎君

東京市外下濠谷七八二
明治廿一年十一月廿八日生

家族 妻に小供四名

村井君本姓は堀永、父は有隣、母はこんめ其二男に

東京市 木、マ之部

して名賀郡比奈知村大字瀧ノ原に生るゝ、明治三十五年父に隨ひて上京す、幼にして明敏夙に俊才の聞へ高く中學校高等學校共に首席を以て卒業し村井貞之助氏に見出されて其養嗣子となる、大正三年東京帝國大學を卒業し直ちに農商務省に入り爾來累進して商工書記官に進み現に商工省商政課長を勤務し外務省書記官に兼任せられ現在に及ぶ村井家は日本に名ある實業家にして銀行業を營みつゝあるも君は出でて官吏生活をなしつつあり、前途有意の青年高等官として多くを期待されつゝあり、資性温厚君子の風あり、現在従五位勳五等たり。

町井 鐵之介君

東京市京橋區南鍋屋町二
元治元年正月二十一日生

家族 妻種子靜岡縣富士郡原田村田村氏女、母みち

町井君、父は治縣大參事、大區長、郡長等に歴任し徳望ありし人なり、上野町大



字愛宕町士族の家に生る明治十六年笈を負ふて上京し幾多の艱難苦難を闘ひて苦學し遂に法律學の蘊奥を極め現住所に辯護士事務所を開く性温厚にして篤學の士なるの故を以て世の所謂三百代言的辯護士の比に非ず、常に懇切と丁寧を以て依頼に應じ苟くも名利に拘泥するが如き事は君の斷じてなさざる處、故に其徳を慕ひて依頼に来る者多く東都辯護士中巍然として頭角をあらはすに至る、

又同業者間の信任と尊敬を受くること深く多年帝國辯護士會理事、東京辯護士會常務委員、同副會長等に擧げられ法曹界の爲め貢献する處尠からず、近年不良辯護士の激増に伴ひ同業者の品性低落を歎じ有力辯護士同志相謀り東京第一辯護士會を組織其幹部員に選ばれる、又東都大震災後の復興に際し帝都復興區劃整理委員に任せらる、

其他南鍋町々會議長、藤堂伯爵家顧問、同家政評議員在京三重縣人會長、蜂須賀侯爵家顧問等に歴任し信任を博し名聲高まる、又公共心に富み息泰夫氏の死去後其藏書全部を東京府下野方村蓮花寺に寄贈し別に泰然庵を新築し之に其圖書を置き一般に參觀せしめつゝあり、伊賀出身在京者中の雄を以て稱せられ

つゝある成功者なり。

藤島 範 手君

東京市牛込區東五軒目三四
明治四年八月十五日生
家族 妻かれん(五五)長男敏郎(三一)二男孝平(一九)三男良平(二四)四男昌平(二三)五男雄平(二二)長女信子(一九)二女千代子(一五)

藤島君は日本郵船會社の重役なり、阿山郡西柘植村二九七番地に生る、幼にして明敏俊才の聞へあり、東京帝國大學工科大学を卒業し日本郵船會社に勤務す、爾來約三十年間一日の如く恪勤し全社運輸課船船課等に勤務し海外貿易、國際關係等に偉大なる功績を胎し遂に抜かれて其重役となり現在に至る、資性温厚徒らに野心を藏せず孜孜として自己の業務に従ふ、其今日の成功を修めたるは十年變ぜざる勤勞の賜ひに外ならず、何事にも倦怠し易き伊賀人の學ぶべき人なり。

菊本直次郎君

東京市赤阪區青山南町六ノ一三
明治三年九月十二日生
家族 夫婦の外に五男二女あり、長男保夫君は慶應大學理財科を卒業し米國を経て英國ケンブリッヂ大學に留學大正十一年末歸朝十五年六月故西宮敬次郎氏の孫多賀子と婚姻す

菊本君は上野町大字萬町の出身者、東京在住伊賀人中の成功者である、裸一貫から一代で數百萬圓の巨



産を得た長者は君を措いて他に求むる事が出来ない、君の生家は舊藤堂藩に仕へた小身者の士族で廢藩後は餘碌乏しく僅

かに子弟の教養に支へ得らる程の家であつた、君は幼年より克く家政の豊かならざるを知り刻苦勉勵して明治二十五年十二月東京慶應大學理財科を卒業し翌年一月三井銀行に入り爾來十年眞に一日の如く精勵業に服し衆人に範を示す、遂に抜かれて各地の支店長に歴任せられ大正三年一月には東京本店營業部長に擧げられ更に同七年一月には常務取締役選ばれて今日尙其職に精勵しつゝあり、大正十三年三月

歐米漫遊の途に上り米國及歐洲各國を歴訪し更に瑞及、印度南洋及支那を遊歴して大正十四年二月歸朝し世界的新智識を得て後進の誘導に力を致してゐる吾等が今茲に大書せなければならぬ處のものは君を

して今日あらしめたものは君の平素の努力即ち忠實業に服すと云ふ事と後進子弟の誘導に熱心な親切味を有すと云ふ事である、其忠實業に服することは三井銀行に入りて以來約三十五年間一日の如く服務して怠る處なきに徴して明かである、又後進誘導に興味を有する事は現在三井銀行内に多くの伊賀人を勤務せしむることによつて窺ふ事が出来る、要するに君は伊賀人中の代表人物として吾等が誇るに足るべきものであると同時に其精勵振りは宜敷く傳へて後世の範とすべきである、君は又祖先崇拜の念に富み祖先が信仰せし天臺宗眞盛派を信仰し菩提寺の爲めには特に喜捨を惜まずと云ふ、又毎日行事として自宅を出る時、歸つた時には必ず祖先の靈前に黙禱して報恩謝徳の念を粗にしたる事なしと云ふに至つて其人格の崇高なる學ぶに足るべき人であることが判る、讀書、園藝を好み日曜日には郊外の散策を楽しみとす。

大阪市及市外

岩島達之助君

大阪市北區堂島上三丁目
明治七年一月十五日生



家族 妻ふさ子北
區眞砂町野口市
兵衛二女長男
太郎(二)大阪
藥學校出身赤十
字社救護所在勤
三男三郎(九)
天王寺中學在學
四男四郎(三)
長女美榮子(二)
三女花重子(一)
女幸(一)大手前高
女(一)七)大手前高
女在學、四女た
女(一)四)ウイ
ミナ高女在學

岩島君は上野町大字魚町の出身にして全國諸新聞關西元賣捌、國際情報社關西總代理店並に諸雜誌取次販賣舶來安全剃刀の關西發賣元並に歐米金屬雜貨及物類の直輸入を業とする萬伸舎の主人公なり、年十九歳にして東京に出で獨立苦學すること二年後横濱輸入雜貨エフヘロッパ商會に勤務三年の後歸郷して油製造業に従事の傍ら萬朝報の販賣をなすこと十ヶ月後大阪に出で平野町一丁目に住し萬朝報の販賣に

從事す、當時僅か五六百部の販賣部數よりなし、明治三十四年堂島に移轉更に大正元年現住所に移轉して今日に至る、此間君は常に顧客本位と云ふよりは發行所本位の營業をなせる爲め全國各新聞社より關西の元賣捌を依頼し來る者多く今や各所の發行紙を通じて實に八十餘社の多きに達し其取扱高は新聞紙七万部寫眞畫報クラヒック其他を通じて四万部の多きに達し全國新聞元賣捌の覇を以て稱せらるゝに至る、支店を大阪市内に内久寶寺町(大正五年設置)西區阿波座下通り一丁目(大正三年設置)曾根崎一丁目大正三年設置に置き別に京都市下京區間ノ町下珠數屋町と臺北市表町二丁目に設け其他取扱店四百五十店の多きに及ぶ盛況なり、君性仁俠心に富み同郷出身者を勞るの念厚く特に其店員に對しては共存共榮主義を採りつゝある爲め本支店を通じて在勤する店員自數十名は何れも和氣堂に滿つるの状態にて業務を勵み居れり、君は常に店員を戒めて曰、商人は常に其元賣捌所の信用を落さざる様努力すべきなり、自己の今日あるは自己を信する製造元あるが爲めなる事を忘るべからずと、君をして今日あらしめたるものは平素の此戒めによるものと云ふべし、其安全剃

刀は三越大丸等一流の百貨店を始め有名なる商店へ元賣しつゝあり、近く神戸に支店を設け又映畫雜誌小禽演藝を發行して知人に職を與へる計畫あり。

井上俊太郎君

西ノ宮市神樂町二〇
明治二十九年二月廿三日生

家族 父金次郎(五二)母小きん(五五)妻糸子(二五)

井上君、父は金次郎、母は小きん其長男にして上野町大字片原町に生る、現大阪營林局林務課長たり、大正三年三重縣立第三中學校を優秀の成績にて卒業進んで第三高等學校に入學大正七年同校卒業、同年東京帝國大學法科を卒業同年文官高等試驗に合格同十一年山林副事務官に任し大阪營林局勤務を命ぜられ十二年山林事務官に進めらる、同十四年大阪營林局林務課長に進められ二府十二縣にある國有林三十七萬町歩其他の事務を掌る、資性磊落にして能く談じ克く語る社交家なり、我郷土出身の青年高等文官中前途を矚目すべき人と言ふべし、君常に慮つて曰、營林局事務は府縣事務の如く外部との接渉密ならず我等が社交的に指導を受くべき府縣會議員の如き者なければ省みて修養せざるべからずと以て日常の心掛けを窺ふべし。

畑中爲吉君

大阪市東區風鳴野町八二八
明治二十九年一月十日生

家族 妻さかへ名張町南出新久吉二女、長男榮一(七)長女淳子(四)次女喜代子(二)

畑中君、父は喜之助、其長男なり、名賀郡阿保町大字阿保に生る、大正三年大阪藥學校を卒業し後大阪赤十字社病院、和歌山今井製藥所等に勤務し大正五年徵兵適令に召されて歩兵第九聯隊に入營、大正七年滿期除隊後直ちに大阪に出で現在の處に朝日橋藥局を經營して現在に至る、性温厚にして社交に富み接客に無粹なるも正直と親切を旨とせる爲め信用日ならずして加はり門前市をなすの大繁昌にて前途洋々の營業状態にあり、未だ大成功の域には達せざるも近く成功の疑なき青年紳商なり、現に大阪府下に於て最も權威ある開局藥劑士會員、大阪計量器同業組合會員等になり同業者間にも重きをなしつゝあり

速水太郎君

大阪市北區天橋筋二
文久二年四月二日生

速水君、父は謙益、母はたけ其長男にして上野町大字忍町に生る、幼にして大阪に出で一世の怪傑岩下清周翁に見出され其寵を受く、資性明敏其頭腦の明析と豪放とは他人の追従を許さざるものあり、壯年

時代より健康を尊ぶため總て徒歩主義を嚴守し今尙之を勵行す、故に遠隔の地に出張するか或は火急の用の外は大阪市内にありても一切の乗物を採らずと豪語し六十幾歳の今日未だ齒一本も喪はず又かつて醫師の診療を乞ひたることなしと云ふ、常に勤儉力行を尊び苟しくも賣名の行爲は一切之を避けて曰、「事業家は棺を負はざれば定まらず、如何に大成したと稱しても事業半ばにして一朝一敗地にまみれることあり、余の如く事業半途にある者は常に慎まざるべからず、故に余は未だ故郷に錦を飾るに至らず今事業を整理しつゝ、あれば昭和四年迄には悉くの事業を後繼者に譲りて伊賀出身の速水を名乗らむ現在では一老書生に過ぎざれば何事も語らず」云々と大阪にありて箕面電鐵、山陽電鐵、阪鶴鐵道、阪急阪神兩電鐵其他幾十の大會社を發起創立し其重役となり何れも好成績を挙げしめつゝ、ありしが近年は實業界隱遁の志あり僅かに阪急電鐵社長外二三を經營しつゝあるのみ近く之も隱退の豫定なりと伊賀出身者中傑出したる事業家と云ふべし。

林 寅 造君

大阪府北區堂島濱通二丁目
明治元年九月二十五日生
家族 妻、この子同市北區富田町林富次郎妹、長男貞之助慶應大學在

全く筆舌に盡すべからず、君は常に思へらく、「奉公人の信條は主家に忠實なること、奉公は人二代に一度すればよい二度の主取りは禁物なり」として夜を日について忠勤を振んず、遂に見出されて林家の總支配人となる、時に明治二十四年なり、當時商人未だ幼稚にして大阪人は海外品の直輸入をなすことを知らず横濱神戸の外國商店を取引先となせり、寅造君之を慨し衆に率先して直輸入をなさんと先づ夜學校に通ひ英語を専攻し其年より直輸入を開始す、大阪機械工具商の直輸入は之を以て嚆矢とす、明治二十六年一月主家より望まれて同族林富次郎氏の女婿となり林姓を冒し合名會社林音吉商店出資者の一人となる、然れども林家の家政未だ振はず明治三十年七月林音吉氏の歿したるときは其全財産は四萬三千圓に過ぎざりき、音吉氏の歿後は寅造君獨り同商店の主宰者となり百方苦辛經營し遂に今日の大富をなし數百萬圓の大資産を抱有すと稱せらる、現在尙機械工具卸小賣を業とし本店を大阪府北區堂島濱通二丁目に有し支店を同市新町通五丁目と東京市日本橋區小傳馬上町とに置き使用人百數十名を指揮して盛んに營業しつゝあり、性公共

學、二女幾子大阪中ノ島宗是町吉田健次養女

林君本姓梶崎、父は助六、母いと名張町大字新町四五番地に生る、年三歳にして母に生別し繼母に育まれ辛慘を嘗む、寅造君祖父は助七鍛冶職にして角力を好み藤堂家より梶ヶ崎の名を賜ふ據つて姓となす祖父の代には家政豊かなりしも父助六投機を好み家財を蕩盡す、寅造君の十五六歳の當時には家尤も貧しく其日の糧を欠く事すらありき君之を憂ひ意を決して家政を挽回せんと志し祖業の大鍛冶屋たらん事を望みて大阪を志して起つ、時に懐中僅かに一圓、途中十五錢の帯一筋を購ひ外に五十六錢を費消し懐中二十九錢を殘すのみ、漸く大阪に着し明治十七年六月八日林音吉商店に雇はる、爾來主家に忠實なること衆に抜きんず、即ち毎朝未明に起床して臺所の手廻り店舖街道の掃除等を他の小僧の臥床中に悉くなし終る、或日未明に例の如く店舖街道の掃除をなし勝手元の手傳ひをなしある隙を窺ふ曲者あり、店先きありし仕事着を窃取し去る、主人はそれを早起きの罪なりとして君を叱責す、然れども早起きを廢めず爾來は他の店員の起床までは勝手元の掃除、佛壇の清淨等をなして曉を待つ、其忠實なる勤勞は

心に富みかつ祖先崇拜、愛郷の念に強く神佛を信仰して其喜捨する處のもの多し、蓋し君の如きも亦稀れに見る偉材にして其治績は遠く後世子孫に傳へて模範とすべきなり、其他君の美事善行を列記すれば枚擧に遑あらざるも其二三を記して略傳となす、因に同商店は電話のみにも本支店合計十個を有し居れり。

濱瀬 虎次郎君

大阪府南區松屋町四三
明治七年九月五日生



家族 妻、この子上野町赤阪町濱邊喜兵衛叔母、三男全市道修町三丁目、藥種商經營、婿、たね子野町向島藤田源七長女

濱瀬君は明治三十三年小資本を抱いて大阪に出で當時未だ普及せられざるビュケットの製造を思ひつき東賑町に工場を起し之を經營して相當の成績を挙げたも未だ十分なる自己の理想に合致せず、明治三十八年廢業して東區神崎町に電話賣買並に金融業を開

始し業績大いに見るべきものあり、大正二年現住地に移轉し同十一年支店を西區四ツ橋南詰に設置して業務の擴張を計る又大正四年には難波新川一丁目に藥種商を起し息鹿次郎氏をして之が經營の任に當らしむ、大正十三年同市道修町にて藥種商の古店を買収し之に移轉盛大に業務を擴張現在にては一ヶ月の純益實に二千圓以上上り住友、山口、鴻池の各銀行上町支店を取引銀行と定め大阪同業者間の勢力家として尊敬せらる、此間明治四十五年明治大帝の崩御あり不景氣一時に襲來して電話相場一時に慘落し大損害を蒙り裸一貫となりたるも屈する事なく遂に年ならずして挽回し現今にては其富數十萬の多きに達し在伊賀人中に成功者として數へらるゝまでに至る、性公共心に富み又後進誘導に興味を有し種々の面倒を見て樂しみとせり。

西田 清 實君

大阪市天王寺區東上町二九
明治二十九年十二月一日生
家族 妻德恵子奈良縣都野村大字白石畑龜松三女、長男嗣幸、次男實

西田君は藤田銀行今福支店長なり、父は龜松名賀郡薦原村大字家野の有力者なり、君は其二男に生る、天王寺中學を卒業し明治大學に入り法科を大正九年

卒業す、後大阪藤田銀行に入り累進して大正十一年擢かれて現職となり今日に至れる人なり、資性温厚社交に長じ良銀行家として附近に令名あり、前途ある青年紳士として在阪伊賀人中矚目さるゝ人なり。

岡 景 助君

大阪市外吹田町三五八
明治十一年三月十七日生
家族 妻と外六名

岡君は日本麥酒株式會社大阪支店經理課長たり、名張町大字峽間の出身なり、父は陵母はつな其三男に生る、明治三十六年東京專修大學を卒業し札幌ビール會社に勤務し三十九年札幌、大阪、日本の三麥酒會社が合併して日本麥酒株式會社となるや之に隨ひて勤務し爾來今日に至る、資性豪放にして磊落社内上下の信任厚し、岡家の祖は近江源氏土岐氏に發す、同家没落後藤堂家に仕へ明治維新に至る、先代陵氏は小區々長名張町長等に歷任地方の功勞者として尊敬せられし人にして明治三十八年六十七歳にて歿す。

岡本 直 道君

大阪南區清水町六〇
明治十二年九月十四日生
家族 長男更生京都繪畫專門學校在學、次男伸二、義妹星野更園實、長女樂子

岡本君、父は多吉、母はまさ其二男にして名賀郡比

尾崎 國 藏君

大阪市北區東野田町七丁目
明治九年一月二日生
家族 妻ひな子、次男和三郎、三男幸助、四男文吉

尾崎君父は彦七代々油搾を業とし阿山郡城南村大字木興に住す、君は其二男なり、幼にして父に逝かれ八歳にして大阪に出で下稚奉公をなして人となり裁斷を業とせしが明治四十年染工業に轉職し家政漸く振ふ、大正六年現在の地に家屋を新築して従業員數十名を使用し主として綿糸メリヤスを盛に染色しつつあり、功にして郷里を去りし故郷土の地理人情に通せず純大阪兒として自他共に任じつつあり、電話東九七二番を有し家業盛大なり。

沖島 豊三 郎君

大阪市浪速區河原町一ノ一五三二
明治十三年七月二日生
家族 妻ひさ子境市少林寺町喜多島男吉長女、長男秀次、次男法弘、三男大圭、四男明、長女美子、次女龍子

沖島君は紹介業者なり、父は彌三郎阿山郡西柘植村大字下柘植に生る、明治三十三年歩兵第九聯隊に入營三十五年滿期除隊農に従事せしが日露戰爭起るや充員召集せられ第二軍に編入金州南山の戦ひに自轉車傳令の重任を帯び服務中膝關節に銃傷を受け兵役を免除せらる、功により恩給年額四百八十圓を支給せらる、明治三十九年大阪に出で日本橋二丁目質商



奈知村大字瀧ノ原に生る、日本美人畫の大家にして大更と號す、明治十九年一家を擧げて東京に移住し爾來赤貧洗ふが如

き中に天資繪畫の嗜好に任せ刻苦奮勵、未だ師を求めず獨學自修遂に今日の如く一派をなすに至る、二十三歳のとき京都に轉じ京都府農事試驗場技手を拜命桃山園藝部在勤を命せられ草花果實蔬菜の寫生に従事す、明治四十年大阪に居を移し同志野田九甫北野恒富營權彦氏等と大阪美術展覽會を起し斯道の改進を叫ぶ傍ら私塾更彩畫塾を開き後進誘導に専念し幾多俊才の門下生を輩出せしむ、現に大阪市美術協會評議員、大毎美術繪畫講習會講師を勤務す、其作品は第一回文展梨果、第八回同温泉の宿、第九回同無果實等入選し其名は全日本に謳はるるに至る、又以て偉材とすべきなり。

古市米次郎方に商業見習として勤務、明治四十三年西區松島町に松ノ鼻俱樂部を經營、大正二年千日前に白鶴バーを經營、同四年同所に紹介業芦邊屋を經營して今日に至る、未だ大成功と言ふに至らざるも相當に手廣く營業し營業者間に重きをなせり。

若山善之丞君

大阪市東區本町四丁目御堂筋
明治二十四年四月二十六日生
家族 妻ならへ名張町大字松崎町柳村傳兵衛長女

若山君は足袋運動靴ゴム靴一式の卸商を經營し信任あり、父は喜代松、名賀郡藏持村大字藏持に生る、明治三十九年故國を出て大阪境筋柿定商店に勤務し主として販賣係に従事す、主家の爲め忠勤を拔んで信用厚し、大正六年四月獨立して久寶寺町二丁目に現在の營業を開始し同九年十一月現在の地に移轉して營業殷盛を極む、其販路は近畿中國九州山陰に最も多く其他全國滿鮮地方に及び日に旺んなるものあり、在阪伊賀人中前途ある紳商として聲名ある一人なり、因に同家の電話は本町一八四六番なり。

梶崎熊次郎君

大阪市西區立會堀北通六丁目二二
明治十八年三月二日生
家族 妻まさ子名張町新町田原半七三女、長男塗之介、長女清子、次女博子共に小學在學、母さの(六八)

明治四十四年主家を辭して獨立同市立賣堀裏町に商店を開きしも僅かに百圓の總資本金の中より自轉車一臺と世帯道具の必要なるものを求めたる残りは其日の糧の料すらに不自由を感じたる有様なれば風呂錢等は本よりなく水に浴して一日の勞を休めし事多く其苦辛は慘憺と云ふ一言に竭されたり、斯くの如き有様なれば衣類の如き元よりあるべき筈なく開業後滿三ヶ年間は年末年始の禮に廻るにも印袴天の外禮服なき爲め未明に廻禮に出る等筆舌に盡し得ざる苦辛をなして漸く人となり大正六年には同市境川に工場を設け遂に數十萬圓の大資本金となるに至る、君は斯くの如く千辛萬苦をしたる爲めに後進者の指導に懇切なる上に仁俠心あり郷里貧民に施米し又同郷後輩者をいたはること深く世人慈父の如く其徳を尊敬す、實に立志傳中のひとすべきなり、又舎弟虎太郎氏に財數萬を分ちて別に家を樹てしむる反面功なりし後は地方實業界に貢獻すべく三四會社の重役もなす、因に住宅を立賣堀北通五丁目に置く電話は新町六四二、同一二七八番を架し居れり。



梶崎君、父は宇之助其二男にして名張町峽間に生る、家甚だ貧しく年十二歳のときより家計の手助けをなし毎日學校より歸れば直ちに鉢力罐の買集め魚會等をせしめらる年十七歳のときより同町堀内源吉方へ年三十圓にて年期奉公をなし二十一歳迄勤続せしも斯くては人なること能はずと決心し大阪に出でて林音吉商店に入り商業見習をなし主人に愛撫せられたるも三年の後病を得て歸り後兵役に徵せられ日露戰役に從軍し凱旋後再び大阪に出で井上商店に奉公して精勵し信任厚く主人の推薦により某金満家より女婿に懇望されしも辭して受けず、此間僅か月三圓の給料を節約して内二圓を故郷の父母に送りて其生活を助けたる爲め印袴天の外身に着けたることなく其活動は他の模範となる、

吉田久四郎君

大阪市南區大和町
明治七年五月四日生



吉田君、父は八右衛門、名賀郡瀧川村大字柏原に生る初め瀧川村より名張町に出で紙石鹼の小賣業をなせしも意に任せず大望を持する者は田舎に居住すべきに非ずと明治三十九年小額の資本を携へて大阪に出で日本橋三丁目石鹼製造工場を建設し専ら輸出製品を出し成功の端緒を得、明治四十三年支那上海英租界に上海油脂株式會社(支那名瑞寶洋行)を設立し自ら其社長となり巨利を博し大阪豪商の一に數へらる、大正四年大和町に本店を移轉し同八年阿山郡府中村佐那具に資本金十五萬圓の神山陶磁器株式會社を經營し美術的タイルを研究製造し遂に之を完成して伊賀タイルの名を廣く滿鮮地方にまで普及せしめ郷土製品

の眞價を上げ、實に愛郷の念の發露なりと言ふべきなり、

大正十年更に有名石鹼美活の登録商標を受け其製造販賣をなし全國的に販路を得從來の製造工場にては狹隘にて需給關係を圓滑ならしむる能はざる爲め、同市玉造中濱町に一千餘坪の工場を工費二十萬圓を投じて建設し旺んに石鹼の製造をなす、一日の製産額實に一千貫の多きに上り販路は主として海外に多く製産の三分二は輸出向きのものなりと、斯くして其營業は日に盛大となり、現今登録を受けたる商標實に四百數十種の多きに及び、以て其般盛振りを窺ふべし、

君が大阪に出でて以來比較的短時日に此大成をなしたるは常に親切主義を高唱し其製品については粗製濫造を慎しみ實質本位としたる爲め外人の信任を得たるによるものにして殊に上海開店當時は日本製品は粗悪の評あり外國品に壓倒せられて賣行き振はず當時國難來の聲漲る、此難局に處して君は獨り製品の改善を計り一意日本品の信用挽回に努めたり、其結果僅か三年後には瑞寶洋行の名は普く支那人の信任を博し他の石鹼を凌駕するに至り遂には支那官權

の信任厚く支那内地の小關稅を免除さるるに至り社業大いに振ふ、君は此經驗に鑑み内地製品の品質向上を時の南商務官に建言して當業者の反對に耳を藉さず石鹼輸出品の検査をなす事となし支那に於ける日本品の聲價を博せしめたる等國産品の品質向上に努めたる處尠からず、

君は實に稀れに見るの活動家にしてグレート大阪市の大實業家として押しも押されぬ聲望を有せり之等は其誠實一貫主義の賜ひと云ふべく伊賀出身者中特に頭角を抜き出したる大成功者なり、事毎に懸引萬能で枯息一點張りの營業をなす伊賀商人の大きい學ぶべき長所を有する人なり、因に電話は本店南二九八八番、工場東三六五五、同四三三八番の外に上海天津等に支店を有し電話の設備等無論完備せり

谷口金太郎君

大阪市北區分町六七
明治五年十月一日生
家族 二男萬年東京外語學校卒業在南米、長女千年小學校訓導奉職
外に三女一男あり何れも修學中

谷口君、父は嘉平治、母はかじ其長男にして阿山郡三田村大字大谷に生る、明治二十八年三月三重縣師範學校を卒業山田郡高等小學校訓導に任せられ三十二年四月上野町外八ヶ村組合高等小學校に榮轉す、

三十二年十二月依願休職を命せられ翌年一月高等師範學校に入學三十五年三月農學地學專修科を卒業四月久留米高等女學校教諭に任せらる、四十年五月滋賀縣立大津高等女學校教諭に轉じ師範學校教諭兼任を命せられ明治四十五年四月兵庫縣加古郡立高等女學校教諭となり大正二年四月同校々長に榮進す、大正九年四月秋田縣大曲町立實科高等女學校長に任せられ高等官六等を以て待遇せらる、大正十年四月依願本官を免せられ同年六月阿山郡立高等女學校教員を囑托せられ十一月九月大阪信愛高等女學校に勤務して現在に至る、功により正七位に叙せらる性温厚の良教育者なり。

谷本 弘君

兵庫縣武庫郡蘆屋濱
明治二十五年四月八日生
家族 妻たい香川縣坂出町多田羅彦右衛門長女、長女曉子(一〇)長男眞(三)弟亥歳生(一六)今津町甲陽中學校在學

谷本君は大阪東區北久太郎町仁丹本舗森下商店理事にして現に廣告課長を勤務す、父は龜藏(明治二年生)母かねよ(明治六年生れ、共に郷里に住す)の長男にして阿山郡友生村大字蓮池に生る、明治四十三年名古屋上宮中學校を卒業後京都第三高等學校に入り同校卒業後東京帝國大學獨文科に入學大正五年同校を優秀の

成績にて卒業大正六年仁丹本舗に勤務することとなり累進して理事に任せられ廣告課長となり現在に至る、資性明敏幼にして俊爽の聞あり、前途ある青年紳商として在阪伊賀人中重きをなせる人なり、谷本家は友生村の舊家にして代々六郎兵衛と稱し祖父の代まで蓮池の庄屋年寄等を勤務したる家柄なり、父龜藏氏又奉公の念に富み名譽職に就任して地方の爲め力を致したる人なり。

高島 敏 造君

兵庫縣明石郡垂水村東垂水
明治十五年五月四日生
家族 妻と一女あり

高島君父は劔助、阿山郡府中村大字服部に生る、現大阪市北濱四丁目日瑞貿易株式會社常務取締役なり上野町丸之内高等小學校を業後三ヶ年間生家において酒造業に従事し後ち志を樹て神戸市に出で外人經營の商店に勤務し傍ら語學の研究をなす、此間十八ヶ年間四商店に勤務す、年卅六歳のとき知友と共に同にて神戸市に株式會社尼崎商店を設立して其常務取締役として二ヶ年間直輸出入業を營みしが同會社を解散して大阪市に現在の日瑞貿易株式會社を創立して其支配人となり後常務取締役に進み現在に至る此間印度内地の視察をなすこと二回約一ヶ年に及び

て印度棉花取引状態を研究して得る處不尠大阪市に於て斯界の權威を以て知らるるに至り大阪三品取引所棉花格附並に裁定委員に任せられつつあり、同家は府中村の舊家にして代々服部に住し舊姓を服部と稱し初代を武助と云ふ、代々村庄屋を勤め七代目平介の代高島と改む、十代より十二代迄大庄屋を勤めたる名家にして君は十四代の孫なり。

津崎 亥之助君

大阪府西區梅本町七
明治八年六月二十日生
家族 妻とみ子名張町鍛冶町菅生徳次郎妹、長女はる子江戸堀高女
出身、婿岡吉名張本町中之坊三佐吉長男、孫進一育三

津崎君、父は嘉助、名賀郡瀧川村大字長坂の出身者にして機械工具木稔等の卸商を經營す、伊賀出身大阪在住成功者の一人として數へらる、明治二十二年大阪に出で林音吉商店に丁稚小僧として奉公し衆に擧んで忠勤を勵む、爾來二十二年間一日の如く主に仕へ功績尠からず、明治四十四年其功に酬ひられ林家の別家として梅本町一九番地に店舗を興へられ獨立す、所謂螢雪の効なりと云ふべし、津崎君以來夜を日に次いで努力活動し遂に其販路を全國より更に滿洲、朝鮮、支那方面に及ぼし富又數十萬圓を得て盛んなる營業をなすに至れり、現今使用人十數名

を置き其營業は日に盛大となりつつあり、大正八年梅本町七番地に廣莊なる店舗を新築し之に移轉し現在に至る、永く林音吉商店に勤務せる爲め林寅造氏の薫陶を受けること大にして寅造君の如く宗教心厚く平素深く神佛を尊崇し祖先の靈を懇ろに祀る、其行ひ又衆の模範とすべきものあり、因に同家の電話は大阪西の三〇一三、二七八九番なり

永井口 嘉平君

大阪府東區今福町三〇七
明治二十四年八月 六日生
家族 妻ひさ子名張町本町大西正之助妹、長女憲美子(六)

永井口君、父は兼松、名賀郡上津村大字勝地に生る長兄角太郎君家を繼ぎ君は分家す、明治四十四年縣立第三中學校を卒業東京高等工業學校に入り大正三年同校卒業後川北電氣企業社に入り難波工場に勤務す、大正四年同工場が今福町に移轉さるるや之に隨ひ現地に移住して工作課煽風機係長に任せられ同年廻轉機係長に榮轉し今日に至る、資性温厚にして業務に熱心聊かも倦む事を知らず、同社に入社以來一日の如く格勤す、故を以て其功空しからず遂に今日の榮位を占め前途猶幾春秋大阪在住伊賀人中の青年紳士として前途を矚目されつつある人なり。

永濱 信造君

兵庫縣西宮市松原町五八
明治十八年二月六日生
家族 妻あい子

永濱君は大阪市北濱野上工業所技師長兼取締役なり本姓は菊井、父は勘次、母はみつ其四男にして上野町大字桑町に生る、鹿兒島市千石町永濱家に養はれその姓を冒す、明治三十七年三月縣立第三中學校を卒業し東京藏前高等工業學校に入學明治四十年七月同校卒業後住友別子銅山、才賀電氣商會に勤務し各地電燈會社の建設に従事して功勞を認められ後日向永電株式會社に入り技師長となる、大正十一年野上工業所より聘せられその技師長兼取締役となりて現在に至る、君は上野町現町會議員大谷愛次郎氏の令弟にして狩獵、園藝、謠曲等の趣味を有す。

中尾 龜太郎君

大阪北區梅ヶ枝町一六四
明治五年二月一日生
家族 妻里子名古屋市東區金杉町横野桑次郎妹、長男博行小學、長女たま子育野高女五學年、次女昌子金蘭高女三年

中尾君は阿山郡上野町大字小玉町の出身にして洋服商を營み在阪伊賀人中成功者の一に數へられつつある人なり、父は門傳醫を業とし藤堂家に仕ふ、君は父の志を繼いで藥種商たるべく明治十八年大阪に出で春元商店に入りしも事志と違ひしより辭して歸り

名守 富三郎君

大阪府西區松島通一丁目
明治四年六月六日生
家族 妻りう子、長男謙三京都市立中學出身、長女ゆき子二女敏子
共に小學校在學

名守家其祖は藏持村の出にして上野町桑町に於て刀鍛冶を業とし名張屋半七と稱す、富三郎君は其二男に生る、廢藩後業を廢し上野町福居町に移住す、富三郎君年六歳にして叔父に當る名守兼吉に養はる、兼吉氏は年十四歳のとき大阪府三島郡三ヶ牧村大字



三島江に出て名張屋と稱して細かなる米穀商を営む、養家豊かならざる爲め十二歳のとき大阪に丁稚奉公を爲したることあり、養父の歿後家業を繼承して三ヶ枚村にありし

も決する處あり明治三十六年十二月大阪松島遊廓に出で名ばかりの貸席業を經營す、性信仰心に富み慈悲心あり使用人を勞はること我子の如く故に一家圓滿にして家政日に旺盛となり年ならず同業者間に認めらる、明治四十年三月松島遊廓同業組合議員に選ばれ爾來重選して大正九年には組合議長に選舉さる、大正八年八月廣島縣御調郡三庄町に浪速遊廓設立の議起るや推されて其組合長となり三庄町の發展に名を擧ぐ、又大正元年家業の發展に伴ひ舊營業所の狹隘を感じたるより現在の第二名張屋を購入し大正十一年更に現在の第一名張屋を購入家政益々振

ふ、大正七年松島遊廓衛生組合長に選ばれ現任中、大正十二年大阪西區會議員松島衛進會長に就職共に現任中にして 阪伊賀人中指を屈すべき成功者と言ふべし、

其君を今日あらしめたるものは君の平素の努力によると雖も一は強烈なる信仰心の賜ひに外ならず、又公共心ありて各種事業に寄附すること多く感謝狀木杯等を授領する事數十回に及ぶ、其他後進者の誘導救済等に力を致して樂しみとせる等學ぶべき處尠からず、

因に名張屋の電話は本店西一一三二番、支店三四五七番なり。

梅田千代松君

大阪市東淀川區南長柄町一七六 明治二十五年一月二日生

家族 妻ふさ子(二九)和歌山縣橋本町一色富之進長女、長女靜子(七)二女照子(二)外に出生地に妹、夫婦あり

梅田君は名張町下横町の出身にして製鋼業梅田製鋼株式會社の専務取締役なり、資性明敏發明心に富み又化學工業の研究を好む、商業學校卒業後製鋼業の有利なるに着眼し製鋼術の發明に腐心研究遂に其目的を達し特許を得て大正三年獨立して郷里名張町

峽間に梅田製鋼所を經營せしが業績大いに上り注文の殺到は遂に需給の圓滑を欠くに至れるより意を決し株式會社組織となす事にし大正七年之を達成せしも交通の不便なる名張町にありては尙意の如くならざる爲め大正



十一年大阪南長柄の現在の地に工場を移轉敷地二千六百坪を購求大工場を新築旺んに製鋼機具を製造すること、なす、現時の不況にも尙三百名の職工を役し相當の好成績を見つゝあり、現在の梅田製鋼株式會社は藤田男爵の令弟彦三郎氏を社長とし梅田君を専務取締役とする資本金三十萬圓の會社なるも事實は百萬圓以上の實力を有し其事業は前途有望のものとして斯業界羨望の的となれり梅田君は現在芦屋に偶居を卜し名張の生家は金物商をなし妹夫妻に一任す。

上田莊太郎君

大阪市東區大手前町大阪府官舎 明治二十二年八月七日生

家族 父庄吉(六〇)母うの(五九)妻登喜三(三〇)東京麻布仲町北里製襪男長女、長男宏(五)長女和(三)外に弟妹あり、父母は上野町に住す

上田君は現大阪府學務部長なり、阿山郡上野町大字

農人町の出身なり、父母兄弟は郷土に住す、明治四十年三重縣立第三中學校を卒業進んで第三高等學校に入學四十二年同校卒業更に東京帝國大學法科大學に入り大正三年同校卒業同年文官高等試験に合格し大正



六年和歌山縣警視に任官さる大正七年同縣理事官に任せられ、八年神奈川縣事務官となり十三年内閣書記官に任せられ十四年埼玉縣警察部長に榮轉更に大正十五年大阪府學務部長に榮轉して現在に至れる人にして從五位勳五等に叙せらる、資性豪放磊落にして頭腦特に明晰幼にして學徒中異彩あり、衆皆其前途矚目す、今や伊賀出身地方官中第一位を占め前途又幾春秋多くの望みを矚すべき人なり。

上久保新七君

大阪市住吉區阿倍野町一九八 明治廿三年四月二十五日生

家族 妻美彌子大阪市北區富田町橋本家出、長女榮子(九)長男正(七)二男武夫(五)

上久保君は株式會社川北電氣企業社經理部長にして

名賀郡箕曲村大字青蓮寺の出身なり、明治三十八年名賀郡南部高等小學校を卒業今堀與三氏につき漢學を修め四十年大阪に出で砲兵工做技術課に入る、後一ヶ年にして歸郷伊和水電會社に入り總務經理を擔任して其才幹を認められ四十二年同社の工事完成と同時に津電燈會社に合併となり従ひて津本社詰めを命せられ後川北電氣企業社長に招かれて同社に勤務し近江水電執事外三ヶ所の工事を擔任して之を完成せしめ社長の信任を得、爾來同會社商事部企業部等に勤務し大正十三年三月社長秘書に任せられ十四年十一月經理部次長に昇進十五年十一月經理部長理事に昇進して現在に至る、君の如く僅かに小學程度の學歷しか有せざるに天下の川北と稱せらるゝ、大電氣企業會社の首腦部員となり其部下に専門學校大學等の高等學を修めたる者を使用する迄に至れることは容易の業に非ず而かも年齒未だ不感に達せざる壯年なるに於いて其人となりを窺ふに足るべきものあり。

窪田義太郎君

兵庫縣豊中町新市街
明治十四年十二月十五日生
家族 妻よね(四一)養女萬龜子(一一)上野町三ノ西窪田保兵衛孫
窪田君、父は源治郎其長男に生る、大阪市立商業學

校(今の高商)を卒業後一年志願兵として歩兵第九聯隊に入營後陸軍三等主計に任せらる、大阪に出で速水太郎氏の紹介にて阪鶴鐵道會社に勤務、同社が鐵道省に買収せらるゝや神戸鐵道局貨物課勤務となる後辭して歸り上野町紺屋町に呉服商を營む、大正元年伊賀鐵道會社の發起人となり創立後其運輸課長を勤務せしか大正九年一月辭して再び上阪、阪急電鐵貨物課長勤務後運輸課長次席に進み更に同會社寶塚經營所溫泉部主任より寶塚經營所主任に榮進現在に至れる人にして伊賀出身者中前途を矚目されつゝある實業家なり。

町田捨郎君

大阪府外阪急沿線豊中村九一
明治二十年二月十五日生
家族 妻すゞ子(上野町車阪北村善七長女、長女千代子(一六)宣眞高
女在學、二女登子(一六)
町田君は大阪北濱二丁目一に店舗を有し株式現物賣買業を經營す、父は小左衛門、母とき其長男なり上野町大字萬町に生る、上野町九成小學校を卒業後大阪加島銀行に勤務大正二年辭して大阪北濱町濱崎商店に勤務、大正九年辭して獨立し現在の商店を經營して今日に至る、資性豪放磊落なるも徒らなる投機心なく店員七名を信任して堅實なる營業を繼續しつ

あり、町田家は舊と友生村下友生に住したる郷士なり、父小左衛門氏は佐那具町野家の出生にして母は萬町富士林氏なり。

藤村猪之助君

大阪市浪速區櫻川一丁目一〇六一
明治八年十月二十日生
家族 妻はる(奈良縣吉野郡龍門村坂西勇吉妹、長女はる子桃谷高
女在學)
藤村君、父は忠次、代々農を業とす、名賀郡瀧川村

大字柏原に生る、明治二十五年大阪に出で西横堀町大橋商店に奉公して商業の見習をなし明治十五年獨立して難波稻荷町に銅鐵商を經營し明治四十年現在の地に移轉、大正三年店舗を新築して現在に及ぶ、大正四年以來銅鐵の暴騰に一大巨利を得しも其後の慘落に手激しき損害を蒙り家政前の如くならず、然れども尙餘融ありて在阪伊賀人中指を屈すべき成功者の一人なり、電話は櫻川八七六番なり。

藤森舜吉君

大阪住吉區天王寺町二〇一
明治十七年八月十五日生
家族 妻さみ(三四)兵庫縣城崎郡口佐津村尾子順久妹、長男洋一
(二三)長女總子(一一)

藤森君は現大阪天王寺島瀉病院長なり父は元章、母はやこ其三男にして上野町小田新地に生る、其生家は代々醫を業とする舊家なり、幼にして明敏小學校

は勿論中學校在學當時俊爽の名を以つて全校を壓す明治四十一年京都府立醫學專門學校を卒業同校附屬療病院日本赤十字社病院及び同院大阪支部病院に勤務し大正四年以來京都府立醫學專門學校助教諭同校教授に任せられ抜かれ京都府より京都帝國大學醫學部に内地留學を命ぜらる、大正九年大阪天王寺島瀉



病院に轉じ同十年醫學博士の學位を受け大正十一年島瀉病院々長となり現在に至る、資性温厚篤實にして仁術業者に適任

たり其技倆と學徳とを慕ひて來る患者多し門前市をなすの盛況にあり、君の如く専門學校の出身にして博士の學位を受けた人は稀れに見る處にして一に伊賀の産んだ偉材とするに足る。

米山義績君

兵庫縣西宮市馬場町六三
明治二十三年七月卅日生
家族 母靜子、妻雅代、長女和子(八)長男義壽(六)



米山君、父は義雄其長男にして名賀郡錦生村大字黒田に生る、明治四十二年三月三重縣立第三中學校を卒業後直ちに第三

高等學校に入り大正五年同校卒業京都帝國大學醫科大學に入り同校卒業後同大學病院小兒科教室に勤務し大正七年十月南滿洲鐵道株式會社撫順炭坑醫院長として赴任、大正九年五月同上長春醫院々長に榮轉大正十二年五月京都帝國大學醫學部大學院に入學を命ぜらる、同十四年十二月醫學博士の學位を受け滿鐵を辭して西宮市に病院を開業して現在に至る、資性温厚にして博學多識特に頭腦の明晰なる驚くべきものあり、前途有意的の青年醫學者として先輩の囑目を受く、讀書と園藝を樂みとす、米山家は代々醫を業とし附近に聞へたる舊家なり。

寺島伊太郎君

大阪府天王寺區堀越町鐵道省官舎 明治六年八月十七日生

家族 妻千代子大和宇智郡北内村河村幸次郎姉、長男正二天王寺中學在學、二男秀夫小學校在學、長女和子明淨高等女學校在學 寺島君父は伊兵衛、名張町大字上横町に生る、家代々綿糸商を營む、明治三十一年關西鐵道四日市驛に勤務し誠實業に服し拔擢されて三十六年五月助役に進み爾來天王寺、奈良、五條等の各驛に歴任し明治三十八年今宮驛長に榮進し後橋本驛長に轉じ四十年十月關西鐵道の鐵道院に買收せらる、や同院に採用せられ四十二年津驛長に榮轉、四十四年鳥羽驛長となり翌年大阪市内營業所主任に轉じ大正十年四月天王寺驛長に榮轉、今日に及べる人にして君も亦立志傳中の一人とすべきなり、大正十四年永勤續の功により勳八等を授けらる、性温厚にして愛郷心強く郷黨の誘導に力を致しつゝあり。

出口文郎君

大阪府住吉區住吉町字帝塚山 明治二十四年二月五日生

家族 母はな、妻ひさ子(二四)滋賀縣今津町石崎權吉長女、長男皓造、長女澄子、二女起佐子、三女美美子、四女佳津子 出口君はエンブロイダールレース專業卸商を經營し今「出口のレース」か「レースの出口」かと稱せられつゝある國家的大豪商たり年十三歳にして大阪東區瓦町



服部毛織物商店に丁稚奉公をなし勤續十五ヶ年、後獨立して毛織物商を主家の近く瓦町に經營せしが大正八年日本にレ

スの専門店なきを慨し卒充して冒險的に之を開業し後平野町四丁目心齋橋筋に移轉し常に時代の趨勢を看取し克く時代に適應する施設をなし巨利を博し大正九年には東京日本橋區横山町一丁目と名古屋市西區下長者町三丁目とに支店を開設大いに事業を擴張せるが大正十二年九月の東京大震災にて十數萬の大損害を蒙り爲めに漸くにして盛大ならんとする營業に一頓挫を來すことゝなれるも難事に遭遇して勇氣百倍する君は屈する處を知らず百方計畫して大正十四年二月には大連大山通二丁目に支店を設け十五年三月には大阪平野町境筋に陳列所を設け現在に至りては震災前に倍する優勢を示しつゝあり、性豪腹に



浅野敏郎君

兵庫縣川邊郡伊丹町 明治十年七月六日生

して公共心あり郷土の社會事業に出資を惜まず既に各所に數萬金を出す、前途ある國家的大商人として期待されつゝあり。 家族 妻隆子滋賀縣長野町與田文右衛門二女、長男敏(九)大阪高等學校在學、二男正敏(一四)伊丹中學校在學、三男三郎(一八)大阪重(六)長女敏子(七)大阪女子專門學校在學、二女照子(一〇)三女榮子(一三)女八重子(一五) 浅野君、父は貞之輔、其長男にして名賀郡比自岐村大字岡波に生る、現キリンビール株式會社技師長兼神崎工場長なり、明治三十二年三重縣立第一中學校を卒業第三高等學校に入り三十五年同校卒業進んで東京帝國大學農科大學に入學明治三十八年同校を卒業奈良縣立農林學校教諭を拜命して在勤一ヶ年後辭してキリンビール株式會社横濱工場に勤務す、大正五年同社より海外視察を命ぜられ米國に渡航、約一ヶ年詳さに麥

酒製造の實況を視察し更に歐洲諸國を視察の豫定なりしも歐洲戰亂未だ終局せず爲めに豫定を變じて大正六年歸朝、神崎工場を設置することとなり之が建築設計の任に當り同工場技師長として勤務することとなり後工場長兼務を命せられ現在に至る、資性豪放、寡言なるも温情を有すること伊賀人中稀れに見る處なり、伊賀人中もし職を求むるに窮する者あるときは百方奔走して之を救ふ、現に君が勤務する神崎工場五百の職工労働者中其半数は伊賀出身者なりと、以つて其實を知るべし、君又公共心に富み地方の大小公益事業に寄附する處多大、實に現代稀れに見るの人材とすべきなり、(名賀郡の部淺野貞之輔君項参照)

廣島庄太郎君

大阪府南區瓦屋町逓信局官舎
明治十四年六月二日生

家族

廣島君は現大阪中央電信局長として令名ある人なり阿山郡友生村大字喰代に生る、明治三十二年二月通信書記補に任じ大阪郵便電信局在勤を命せられ同年四月東京郵便電信學校へ入學の爲め上京を命せられ三十三年四月同校通信科を卒業通信書記に任せられ

大阪郵便電信局勤務を命せらる、明治四十二年五月大阪郵便局電信課主幹に任せられ翌年四月大阪中央電信局受付配達課長を命せらる、大正七年八月大阪中央電信局通信課長を命せられ翌八年五月逓信事務官補に任せられ大正九年十月逓信事務官に進めらる十三年六月大阪中央電信局長を命せられ同年十一月大阪無線電信局長兼務を命せらる、大正十五年六月抜かれて伊太利出張を命せられ歸途英國及び米國を経由して同年十二月歸朝す、資性温厚頭腦又明晰僅かに初等教育を受けたるのみにて苦學力行大成せし人にして眞に青年子女の範とすべきものあり、功により従六位勳五等に叙せらる。

森 朴 沱君

西ノ宮市今津町津門
明治十七年 月 日生

家族 妻美代子麗兒島縣人吉田進之助四女、長男甲吉(一三)二男武次(一一)外に二男あり

森君本姓は松本、父は嘉左衛門其六男にして比奈知村大字上比奈知に生る、二歳にして父母に死別し五歳にして箕曲村青蓮寺森懋氏に養はれ其姓を冒す、三重縣立第一中學校を卒業進んで大阪高等工業學校に入り同校を卒業後上野町田中善助氏の紹介により大阪電燈株式會社に入り技術課に勤務す、後會社よ

り援擡せられて安治川發電所設置について發電機購入の爲め米國へ出張を命せられ同地に六ヶ月滞在親しく機械學の研究をなした後歐洲諸國を視察一ヶ年の後歸朝す、時に年二十七歳、大阪電氣會社技術部主任となり、春日出發電所設置について偉功あり、會社樞要の地位を與へらる、會社が大阪市に買収せらることとなるや同社殘務整理主任を命せられ其殘務を大同電氣會社に合併し大同電氣會社大阪支店技術課長として今日に至る、性卒直にして寡慾社内の信任を蒐めつゝある前途幾春秋の青年實業家として矚目さる。

森 西 謙 吉君

大阪府西區九條通り三丁目
明治二十四年四月五日生

家族 妻康子大阪北區南同志町一亀井菊太郎三女



森西君洋服商を營む傍ら安治川郵便局長を勤務す、父は完次郎、母はしを其長男にして阿山郡城南村大字木興に生る、明

治三十八年大阪に出で通信生養成所に入り同所修業

の後各地郵便局に勤務、志を變じ明治四十五年高麗橋松本洋服店に入り洋服商人を見習ひ大正四年七月獨立して高麗橋一丁目松屋洋服店を經營す、大正七年三月現地に移轉して現在に至る、常に時代の趨勢に適應する施設を怠らず、大正十年より君獨特の草案になる代理店制を設け各地に代理店を設置して其營業を取次がしむ、其代理店は日本内地は元より滿洲、樺太、朝鮮、臺灣等を合して實に百五十ヶ所の多きに上り其基礎は愈々鞏固なるものあり、大正十年二月大阪安治川郵便局長に任命せられて現任に至る、近く洋服店を株式組織に變更して大々的の發表をなす計畫をなしつゝあり、現在店員十七名を置く。

森 崎 理 也君

神戸市仲町通二丁目
明治二年一月十六日生

家族 妻せい子(五〇)山陽線廣島驛前中島卯吉妹、長男了三(三〇)三男慶三(二五)長子充子(一五)

森崎君は株式會社東松軒の社長なり、父は平右衛門母はたみ其二男にして名賀郡神戸村大字下神戸に生る、資性豪腹極めて孝心に富み又公共心あり、年三三歳にして大阪に出で種々の勞働をなしたるが激勞の結果遂に病氣となり非常なる困窮に遭遇し或時は眠



るに家なく食ふに金なき迄に零落す、然れども性來豪腹我慢の君は家兄や知己の同情に據る事を好まず聞くも語るも涙で

堅められたる苦辛慘膽をなし漸くにして病氣を治し小資を得て姫路に行き些かなる飲食店を經營し後神戸市に移住東松軒を經營列車食堂の請負をなし後之を同族の株式會社となし其社長に就任今日の大成をなせる人なり、青年時代よりの苦辛を忘れず加ふるに仁俠心に富むの故を以つて諸方面の公共事業に寄附を惜まず郷村神戸村小學校へ金五千圓を獎學基金として寄附す、其老母に對する孝心は實に感すべきものありと傳へらる、又以つて立志傳中の一人とすべきなり。

名古屋市

今中信太郎君

名古屋市中區南小川町四三
明治十七年三月二十五日生
家族 父徳次郎、母うの子、妻久子名賀郡美濃波多村新田山村正通姉

今中君は上野町大字西町に生る、家世洋服商を業とせしが明治三十年廢して名古屋市に出づ、信太郎君明治三十八年東京正則中學校を卒業北濱銀行名古屋支店に入りしも同行の破綻と同時に萬歲生命保險會社に勤務し大正元年辭して名古屋俱樂部書記長に就任す、後神谷商事株式會社に勤務し傍ら主命に従ひ名古屋砂糖商同業組合を組織し其書記長に選任せらる、大正四年中央パザールに於いて玩具商を開き夫人の内職たらしむ、大正十二年十一月九日印刷株式會社を設立し其常務取締役に擧げらる、大正十五年四月星製藥愛知縣配給所長となりしも辭して閑地にあり、君は稀れに見る活動家にして事業を好み在名伊賀人會中重きをなせる人なり。

服部 義三君

名古屋市東區吳服町二ノ六
明治十八年十月八日生
家族 妻さみ子名賀郡比奈知村下比奈知松崎三郎二女、長男禮二二男保二



服部君、父は保太郎名賀郡瀧川村大字長坂の出身なり保太郎氏は瀧川村の長老にして名賀郡の有力者として長く瀧川村長

の榮職にあり、君は其次男に生る、明治三十九年里にて酒造業に従事中脚部に大負傷をなし療養の爲め名古屋市に出でたるが動機となり合資會社西脇商店に勤務し七ヶ年間勤續後義兄西脇仙松氏方にて毛織物販賣に従事すること八ヶ年大正十三年現在の住所に獨立して多年經驗せる毛織物商を經營して今日に至る、創業後日尙淺きに抱らず販路を廣く全國的に有し盛大に商賣をなしつゝあり、電話東六六八三番に加入す。

富永 貞英君

名古屋市東區伊勢町一ノ一
明治十二年一月四日生
家族 妻はるへ子、長男貞一(一九)小學校訓導、二男貞二(一七)熱田中學在學、三男貞三(一五)二女貞子(二〇)小學校訓導、三女

岡田 藤吉君

名古屋市御器所町大字荒畑四六
明治十八年十月十日生
家族 妻房江三重縣北牟婁郡引本町森下龜藏妹、長女千代子名古屋



第一高女在學、二男檢(五)三男豊

岡田君は名賀郡猪田村大字筈部の出身にして名古屋在住伊賀人中重きをなせる人なり、元は教

育家にして縣下各地の小學校に歴任し大正三年より辭して生命保險業に従事し萬歳生命保險株式會社に入り同社名古屋支店長に榮進し後萬歳生命保險會社の合併せられて日華生命保險會社となるや其支店長に榮轉し今日に及ぶ、性温厚にして同郷人の誘導に意を用ひ常に在名の後進同郷者を指導しつゝあり。

谷口千五郎君

名古屋市中區千種赤塚五三
明治廿一年二月二十三日生
家族 妻千代子阿山郡山田村山田富島莊長女、長男道雄、二男成章、長女總子

谷口君は木綿織物業を經營す、阿山郡阿波村谷口吉太郎氏の令弟なり、明治三十九年上野中學校を卒業名古屋高等工業學校に入り明治四十三年同校を卒業

和歌山紡績其他に勤務し大正五年名古屋市に出で宮町服部商店織物工場に勤務し織物業の經驗を経て大正十一年現在の所に五百坪の織物工場を新築し綿織專業を創む、目下電動力十三馬力雇人四十名を使用して旺んに營業しつゝあり、性豪放にして寡慾、在名同郷人中に噴々の評あり、謠曲、撞球等を樂む、電話は東五三四七番なり。

山本重造君

名古屋市中區菊井町三ノ三〇
明治十年十一月一日生
家族 妻たきよ桑名郡野代村中須伊藤茂十郎長女

山本君、父は重五郎、上野町大字赤阪の古着質商に生る、幼にして書を好み鈴木派を學び後梅逸竹洞の書風を研究しつゝ今日に至る、明治二十七年京都市に出で明治三十年東京に學び傍ら萬朝報記者となりしも暫くにして辭し専ら書道の研究をなす、明治四十四年名古屋に移住現地に住し中央南書協會員となり書道の研究に餘念なく技大いに進み信任又加はり江西小學校教育會評議員、菊井町三丁目東部副總代江西聯區青年副團長に擧げられ地方公共の爲めに力を致しつゝあり。

福地劍吉君

名古屋市中區長堀町二ノ三
明治十六年一月十一日生



家族 母りよ子、妻文子札幌市苗穂町安善氏治四女、長男比古太(二)

福地君は現名古屋地方裁判所部長判事なり、父は太八郎其長男にして阿山郡東柘

植村大字上柘植に生る、幼にして明敏夙に俊才の譽高し、縣立津中學校を卒業後京都第三高等學校を経て京都帝國大學法科大學に入り明治四十一年七月同大學を卒業、同月司法官試補に任せられ四十四年十二月判事に任せらる、爾來大阪、山形、札幌、名古屋等の地方裁判所又は控訴院等に勤務し大正十三年一月部長判事に任せらる、大正十五年四月陪審法其他視察の爲め歐米各國に出張を命ぜられ現在に至る此間北海道帝國大學、名古屋高等商業學校の講師を囑托されたることあり、資性温厚無言にして實行を好む當代得難き名判事として噴々の評あり、功によ

佐倉久次郎君

名古屋市中區東瓦町二二
明治十九年十一月十八日生
家族 妻繁子名張町本町古屋彌太郎妹、長男政次郎、二男博尾張商業學校在學、三男俊次、長女富美子中央裁縫高女卒業、二女綾子、三女美代子

佐倉君はシヨール洋傘卸商を營み最近成功せる一人なり、父は儀之助名張町本町に生る、明治四十二年上野中學校を中途退學をなし名古屋市に出で鐵砲町川井合名會社に入る、性業務に熱心にして夜を日に次いで精勵し僅か三年の後は同商店支配人に拔擢さる、以來大正九年八月迄同商店に勤務し主人の信任を受く、同年別家を許され中區南新町に山保の商號を附し獨立業を起し大正十二年現在の地に營業所を新築して家業漸く順調ならんとするのとき關東の大震災に遭遇し數萬圓の損害をなし將に破産に瀕せんとせしも屈せず家業の挽回に努め漸く今日あるを見る、販路を全國的に有し信任あり、因に電話は東

六六一五番なり。

北出龜松君

名古屋西區泥江町三丁目
明治六年四月二十五日生

家族 妻かめの壬生野村西ノ澤田中斧吉妹、長男英雄名倫中學四年
北出君は阿山郡河合村馬場の出身にして名古屋驛前泥江町に陶器商を営む、父は又兵衛代々農を業とす明治三十五年郷土製品丸柱焼信樂焼を世に紹介すべく現在の處に伊賀屋と號して陶器店を開き伊賀物産の紹介に努め西部東海道に丸柱焼信樂焼の名を博め家業又大いに振ふに至る、性信仰心に富み深く天理教を信じ天理教敷島大教會敷名宣教所長に任せられ教會の爲め力を致す、大正三年以來泥江町衛生組合長、西區衛生聯合組合理事、名古屋衛生總聯合會理事、泥江町總代、同青年團長、名古屋教育會議員、聯區教育會議員、名古屋陶磁器組合副長、名古屋西部陶器組合長、第一回國勢調査委員等に歴任し聲望高く在名伊賀人中重きをなせる人なり。

菅生辰次郎君

名古屋市東區千種内山
明治八年三月八日生

家族 妻と娘二人の四人暮らし、弟邦三君は宇治山田市山田家に養はれる豫備歩兵中尉なり。
菅生君は名張町大字八丁の出身なり、資性温厚にし

京都府

伊室治夫君

京都府船井郡岡部町
明治二十一年一月一日生

伊室君は現京都府警部にして園部警察署長を拜命す縣立上野中學校を卒業後京都武徳會武術専門學校に入り同校を卒業して更に東京警察練習所を卒業、明治四十二年三重縣巡查を拜命累進して警部に任せられ大正二年依願退職し三重縣立師範學校教諭心得を拜命大正五年辭して京都府警部補に任官同七年警部に進められ一時内務省警保局囑托となり後京都府保安課に勤務し木津警察署長より園部警察署長に榮轉現在に至れる人にして運動登山武術特に柔道を好み園基を樂しむ、性活潑豪放にして豪傑肌の人なり、民衆的良警察官として地方民より尊敬せられつつあり。

宇佐玄雄君

京都市上京區東福寺山内
明治十九年四月十五日生

家族 妻トク(三六)栃木縣下都賀郡壬生町三原親輔三女、長男晋一(當歳)
宇佐君本姓中井、父は宇之助布引村大字坂下に生る初の名は宇之吉上野町惠美須町宇佐玄拙氏に養はれ



て神佛の信仰心厚く又郷土愛護の念に富む、明治二十七年名賀郡書記を拜命し翌二十八年鈴鹿郡書記に轉任爾來度會飯南二郡書記に歴任し明治三十五年實業界に志し官を辭して東都に上り在京十數年貿易商奧田商店に勤務後名古屋に移り東邦(元名古屋)瓦斯株式會社に勤務することとなり現に其營業部長に就任しつゝあり、傍ら同郷人の親睦を計る目的を以て名古屋在住三重縣人會、同伊賀人會、名古屋講堂會等を組織し其幹事となり公私の爲め力を致す處尠からず、在名伊賀人中重きをなせる人にして同郷人中の信任極めて厚し

其姓を冒し玄雄と改む、明治三十七年四月三重縣第三中學校を卒業同年東京早稻田大學高等豫科に入學四十一年七月大學部文學科哲學科を卒業後更に哲學科研究科に學び四十四年九月同校を出で大正二年四月より十二月迄京都大德寺内臨濟宗專門道場に修禪し同月上野町三溪寺住職を拜命す、大正四年四月東京慈惠會醫科大學豫科に入學大正八年三月同校卒業同年八月より十一月迄東京帝國大學醫學部精神病學研究室にあり同年十月京都東福寺經營三聖醫院々長として勤務現在に至る、精神病に對しては特に造詣深く來りて診を乞ふ者多く門前市をなすの盛況にあり、毎日曜日に上野町丸之内診療所に出張す。

菊地利房君

京都市上京區岡崎北御所町二五
明治二十三年二月二十七日生

菊地君、本姓は福森、父は利三、母はとき其二男にして上野町大字中町二番地に生る、資性明敏幼にして俊爽の聞へ高し、大正六年三月東京帝國大學法科大學獨逸法律學科を優等の成績を以て卒業同年四月東京帝國大學大學院に入學同年五月より同八年四月まで内務省に奉職す、大正八年五月東京市に於て辯護士を開業、翌九年四月雉本朗造博士と共に大阪日本

法律研究所を設立して其一員となる、大正九年六月以降出資關係にて大日本紡績株式會社、日本製糸株式會社、日本共立火災保險株式會社等の取締役に擧げられ現在に至る、君學にあるや生家豊かならざる爲め十分なる學資を受くる能はず、自給自足の大精神を以て克く刻苦勉勵遂に最高學府を出で、人となり認められ日本實業界の巨頭菊地氏に見出されて其女



婿となり今日の成功をなしたる人にして其半生の立志傳は文字其儘の奮闘を以て築かれたるものなりと云ふ又以て當代得難き模範人と見ふべきなり。

廣澤 明君

京都市上京區日暮通下立賣上ル
明治三十一年七月一日生

家族 父ト妻外ニ使用人

廣澤君は名賀郡神戸村大字上林の出身なり、羽織紐

關東州

稻葉 逸好君

奉天八幡町八番地
明治十二年四月十九日生

稻葉君本姓大申道、父は莊太郎、母は小てる其次男にして名賀郡比奈知村大字下比奈知の舊家に生れ阿山郡友生村大字蓮池の稻葉家に養はれて其姓を冒す明治三十三年三月三重縣立第一中學校を卒業後第四高等學校に入り三十三年七月同校卒業直ちに京都帝

國醫科大學に入學三十七年十一月同校を卒業同醫科大學副手となる、三十八年六月同大學助手に任せられ四十二年十二月同大學助教に進めらる、明治四十三年一月在官のまゝ、南滿州鐵道株式會社職員たることを許可せられ大連醫院勤務を命ぜらる、同年二月從七位を叙し四十四年六月南滿醫學堂教授兼務を命ぜられ八月滿二ヶ年獨逸留學を命ぜらる、四十五年一月高等官六等に陞り二月正七位に叙せらる、大正元年十二月京都醫大助教休職を命ぜらる、同三年十二月獨逸より歸朝し南滿醫學堂教授兼醫長を命ぜられ奉天醫院勤務となる、五年十二月醫學博士の學位を授與せられ九年八月南滿醫學堂長兼奉天醫院長を命ぜらる、同十一年五月滿州醫科大學長に兼任せられ十四年四月滿州醫科大學長兼南滿醫學堂長兼教授南滿醫學堂附屬奉天醫院勤務醫長を命ぜられ次いで九月滿州醫科大學同專門部教授兼務を命ぜられ現に月俸四百八十圓を給せられつつあり、君又稀れに見るの篤學の士にして伊賀出身者偉材中の一人たることを失はず、資性温厚にして篤實南滿鐵道會社中に定評あり、厚き尊敬を拂はれつつあり。

今井 順吉君

大連第一中學校
明治十一年十一月十九日生



家族 妻カネ(四女) 上野町新町 藤堂三省(四女) 長男美村(二四) 長女英子(二二) 桑名郡深谷村安藤智光妻、三女千枝子(七七) 男明保(二七)

今井君、父は順藏、母はうたの其長男にして上野町大字東日南町に生る、三重縣立師範學校を卒業後文部省中等教員試験に合格し三重縣師範學校、富田中學校、上野中學校等に教鞭を執り大正九年七月大連第一中學校に奉職し高等官五等に昇り從六位に叙せらる、資性温厚篤實の士なり、幼にして頭腦明晰俊才の聞へ高かりし人なり、同家は舊藤堂藩の家臣にし舊家なり。

乙竹 茂郎君

大連橫濱正金銀行支店內
明治十四年十月十八日生

家族 妻鎌倉市荒川巴治女、長女茂子、二男利清、二女十代子、女信子、長男幼天

小島金之助君

朝鮮慶尙道靈泉郡禮泉邑
明治十六年五月十日生



家族 妻くに比
自岐村大字比自
岐森岡友次郎妹
長女りよ、二女
満子、長男龍雄
上中在學、二男
知三、婿(りよ夫
之助弟、大西正
之助弟、満子
大)矢持村奥龍
野角田熊藤二男
孫藤一、久代

小島君は名賀郡上津村大字

北山の出身にして家世代々農を業とす、明治四十一年志を樹て憲兵に志願して渡鮮せしも病を得て辭職し四十四月歸郷す、同年十月再び渡鮮各地を檢分の後大正二年現在の地に米穀運送業を開始し成功の端緒を得、同十三年東洋拓殖株式會社經營地監理人小作米保監人を依託せられ其他煙草元賣捌き、スタンダート石油特約店、穀物商、旅館(商號島屋)禮泉郡農會員製繭監理人、周旋業等諸種の事業に携はり事毎に好成績を擧げ今や同地在住内地人間に重視せらるゝに至る、かくて衆望大いに集まり大正五年には禮泉學校組合評議員、同十一年には面協議員同十五年四月には郡農會評議員等に擧げられ公的方面にも奔走することとなり聲望年と共に加はり財又大いに増し在鮮邦人中の成功者の一人と稱せらる、蓋し今日あるを致さしめたるは田舎生れる純朴なる誠實一天張りの營業方針に基くものにして又學ぶに足るべしと言ふべし。

住澤

龍君

小野田セメント會社大連支社
明治三十七年一月一日生

住澤君父は勇吉名賀郡阿保町に生る、資性快活英斷を好む、阿保小學校尋常科を卒業後上野中學校に入

學五學年のとき學校當局が修學旅行を禁止せる事に發端して遂に同盟休校の擧に出でた熱情の人なり、大正十一年三月上野中學校を卒業上京して東北大學教授佐藤博士の經營する工業化學研究所を訪れたるに博士は自然化學と宗教の著を贈りて其將來の進むべき道を教ふ、君即ち期する處あり大正十二年濱松高等工業學校に入り後セメント工業を専攻し十五年三月同校卒業と同時に小野田セメント株式會社に入り次いで大連支店在勤を命せられて現在に至る、前途有意の實業家として地方民より期待さる、水泳とパイオリン彈奏を趣味として水泳は五里の免許を有す。

其他

今堀勸右衛門君

大津市榎屋町一〇
安政元年九月二十二日生

家族 妻ちか滋賀郡木戸村南平中川龜吉方より、養嗣子金藏(二九) 滋賀縣高島郡川上村濱分清水麟藏弟、婦きみよ(二四)阿山郡猪田村今堀惣太郎妹、孫春子(六)金治(二)

今堀君は名賀郡猪田村の出身なり、父は勸造其長男

大津市 イ之部



邊七左衛門方の若侍に入り其薰陶を受く、慶應二年秋山崎戰爭の起るや之に参加す、翌年春戰爭終了し上野町に歸り引續き渡邊家に仕事す、後三年同家を辭し十六歳のとき郷士に登用せられ藤堂和泉守に仕ふ天性の發明は遂に藩主の認むる處となり無足人に進められ御紋附黒羽織を拜領す、年二十一歳のとき廢藩と同時に辭して宗家に歸り農業の傍ら荒物商を助けたるが二十三歳のとき別に一家を創立することとなり同村上ノ庄に於て雜貨並に呉服商を經營したるも意の如くならず、三十一歳のとき意を決して大津に出ず然れども本より身に纏ふ財産あるに非ず、又腕に職業あるなく僅かの所持金を程なく費消して

窮迫の極に陥る、約一ヶ年後伊賀傘の販賣を思ひたち使ひ残したる小資を以て伊賀傘を仕入れ傍ら名ばかりの時計修繕業を兼營し刻苦奮闘克く時代に順應する施設をなし家業漸く順調に進む、三年の後傘商を廢して他人に譲り時計専門店となり薄利多賣と信用本位を店是として營業せし結果遂に明治三十七年には大津聯隊の御用商人に指定せられ市民の信任頓に加はる、性仁俠博愛の心に富み今や大津市唯一の大時計店として認めらるゝに至る、衆望の歸する處大津商業會議所議員に當選すること二回大津市會議員たること一期現に大津市樹屋町理事として尊敬せらる、支店を名張町本町と伏見町深草練兵場附近に設置す又店員に時計商を開店せしめたるもの四ヶ所何れも盛大に營業しつゝあり、曰、北海道札幌市宮島熊太郎、豊橋師團前石田林之助、伊賀上野相生町平熊藏、八幡市枝光北本町松井健治等なり、以て其人となりを窺ふべく伊賀の出した一成功者と云ふべきなり。

乙竹仲太郎君

沼津市上香貫町 明治十二年三月四日生
 家族 妻滋子信州諏訪伊藤隆三郎女、長女篠子、三男虔三、二女和夏子、四男直、外に一女、長男二男幼折

尾崎純一君

横濱市岡野町百番地 明治廿三年六月廿九日生
 家族 母ふさ(五九)妻みし(三三)横濱市末吉町二境竹二郎二女長男景吉(六)長女京子(四)二女斐(一)妹千代子(一八)
 尾崎君、父は初次郎、其長男にして鈴鹿郡龜山町に生れ父に従ひて上野町大字上野村字馬場に轉住す現在横濱市に住し金線飲料株式会社經理部長日本飲料株式会社常務取締役を勤務す、初め林又六氏について和漢の學を修め後語學をジョン・イ・ヘル氏に

學び得る處多く高等學府を出でたる者を凌駕し重用さるゝ處多く遂に現位地の榮職につく、資性豪放磊落何事によらず常に衆に先んじて一步を譲らざることに於て大成功をなすべき可能性を有する人なり、劍道、馬術等の運動を好み前途幾春秋、伊賀出身者中重きをなせる人なり。

川口磐夫君

横濱市青木町幸ヶ谷三七七 明治十年九月二日生
 家族 妻稔、長男雄、二男乾之助、三男磐三、長女麗海軍大尉富田一郎妻



川口君は太平洋貿易株式會社常務取締役なり、名賀郡美濃波多村大字新田に生る

明治三十年姫路中學校を卒業、後東京高等商業學校に入り明治三十五年同校を卒業、明治三十六年中央茶業組合紐育出張所員として就職赴任同三十八年同主任に進めらる、後辭して三十九年日本製茶輸出株

式會社紐育支店支配人に就任同四十二年まで在勤し後辭して歸朝、四十三年樺太廳事務囑托となり同廳内務部長中川小十郎氏に隨行して米國に渡り化學工業の視察をなし四十四年歸朝辭任、大正元年横濱市尾上町三丁目太陽貿易會社を設立米國支那貿易に従事せしも事志と違ひ大正四年同社を解散す、大正五年太平洋貿易株式會社支配人となり入社し同八年取締役支配人に就任、大正十年常務取締役となり現在に至る、又傍ら大正九年横濱共立倉庫株式會社監査役に就任同十三年震災後横濱復興會委員、三重縣震災救護會評議員等に就職す、資性豪放磊落にして邊幅を設けず人に接するに温情を以てす、常に後進者の爲め懇ろに教へて誤らしめず、賞すべき點多し又以て伊賀が産んだ一偉材とすべきなり。

大道寺慶男君

岐阜市住吉町 明治 年 月 日生
 家族

大道寺君は名賀郡比奈知村大字下比奈知の出身なり父は應之助其長男なり、岐阜市地方裁判所々屬辯護士なり、明治三十年日本大學を卒業して學士となり國際法を専攻す、明治三十一年高等文官試験に登第



司法官となり
岐阜地方裁判
所御嵩區裁判
所検事に補せ
らる、明治三
十三年辭して
辯護士となり
爾來岐阜市に
居住し岐阜辯

護士會長に擧げられ今尙其職にあり、明治三十三年
政友會創立の際伊藤公爵の勸誘に依り入黨し多年立
憲政友會岐阜縣支部幹事長として重望を擔ふ、大正
九年五月岐阜縣選出衆議院議員に當選す、大正十三
年一月山本、床次、元田の長老と共に政友本黨を創
立して岐阜縣支部總務となり中央政界の大立物とし
て尊敬せられつゝあり、大道寺家は名賀郡唯一の名
家にして代々大里正たり、君の父慶之助好徳、祖父
與治兵衛好信、曾祖父慶助好信、高祖父彌右衛門盛
暢共に地方治水の神として其靈を祀られつゝあり。

谷村 瀨君

福岡市住吉町花園一六六三
明治卅一年二月十三日生
家族 養父猶之助、養母さらゑ(原籍地に住す)妻はる伊賀朝田村服



部孝太郎三女、
長女宣子(五)二
女誠子
谷村君は九州
帝國大學教授
なり、本姓は
中林父は卯平
治其三男にし
て壬生野村大
字川西に生る

父の生家なる同字谷村猶之助氏に養はれて其姓を冒
す、幼にして明敏學童の範となる、大正四年三月三
重縣立第三中學校を卒業同年九月京都第三高等學校
に入り大正七年同校卒業直ちに東京帝國大學工學部
に入學し鐵冶金學を専攻す、同十年三月同大學を卒
業し同年五月擢かれて九州帝國大學講師に任官され
赴任同十一年十一月同大學助教授に進められ爾來引
續き勤務中、常に研學を怠らず鐵冶金學研究に没頭
す其熱心なること同校内に定評あり、前途ある青年
學者として期待されつゝあり。

山崎 光 夫君

福岡市荒戸東通町一〇九
明治二十九年四月十三日生

家族 妻久榮(二四)弟登福岡高等學校在學

山崎君、父は好吉、母はひさよ、阿山西柘植村大字
楯岡に生る、現在福岡高等學校教授を拜命す、大正
十一年四月東京帝國大學理學部を卒業し福岡高等學
校講師を拜命し大正十二年福岡高等學校教授に任せ
られ高等官七等となり同年十月從七位に叙せらる、
同十四年七月高等官六等に昇任同八月正七位に叙せ
られ今日に至る、資性温厚前途ある青年教育家とし
て矚目さる、山岳跋涉の趣味を有し特に郷土を愛す
る念強く又祖先の遺徳と父母の恩愛を深く偲びて忘
るる事なき等は稀れに見る青年教育者と言ふべきな
り因に君の令兄山崎次郎氏は豫備陸軍憲兵少佐にし
て其の一族は揃つた俊才を出せる家なり(西柘植村
山崎好吉氏項參照)

福岡市荒戸 之部

福持 壽 雄君

愛媛縣西宇和郡川ノ石町東紡社宅
明治廿二年三月二十日生

家族 妻久子名古
屋市東區車道堀
尾ふき娘、長男
隆雄、二男 昭清
長女和子共に小
學在學



在名伊賀人會
中唯一の成功
者に福持壽雄
君があつた、
君は名賀郡錦

生村大字安部田福持善之亟氏の令弟なり、明治四十
年上野中學校を卒業後大阪高等工業學校に入り四十
三年同校を卒業、三重紡績名古屋工場に入り一ヶ年
間實習生として職工の群に入り油服を身に纏ひ實地
の研究をなし後知多工場工務係技師に榮轉、大正三
年三重紡績會社が東洋紡績會社に合併さるや之に従
ひて東紡技師となり同九年桑名工場副工場長に榮轉
同十年東紡尾張工場長に榮轉し同十五年六月同川ノ
石工場長に轉じて今日に至れる人にして其順調なる

榮進は稀れに見る處である、君が斯く順調なる榮進をなしたるは平素の努力に酬ひられた賜であらうが一面には其學歷や小康に安ずる事なく一職工の心持ちで職務を忠實に献身した結果によるもので順調な生活道を辿りつつある君の半生に學ぶべき處が尠くない、常に工場内に過激思想の擡頭せるなきかを慮りつつ職工監視に一方ならぬ辛勞を費してゐる、一方他に範を示す爲め一般職工と同じく毎日十二時間勞働をなし自ら夜業にも服して聊か倦む事を知らざる處に君の努力が窺はれる、餘暇運動、音樂、謠曲等を樂しみ家庭又他の羨む程の圓滿である、君の行ひこそ實に一般青年學生が範とすべきである。

芥川辰次郎君

高崎市宮元町二一
慶應二年八月五日生
家族 妻つた(四五)長男清(二五)二男治(二三)三男武(一九)

芥川君は辯護士を業し現に群馬縣會議員同縣參事會員の要職にあり傍ら立憲々政會群馬縣支部常任幹事を勤務す、上野町大字惠美須町二六番屋敷の出生なり、明治十三年一月年十五歳にして上野町南部小學校助教授となり二十年四月迄奉職す、同年五月三重縣巡查を拜命して久居署に勤務二十二年十月辭職此

間に蓄積したる僅かなる俸給を學資として明治法律學校(明治法律學校前身)に入り法律及政治學を研究三五年七月同校を



卒業二十六年九月第一回辯護士試験に合格し二十七年一月辯護士名簿に登録さる
明治二十六年十月裁判所書

記に任せられしも程なく辭して翌年二月東京地方裁判所々屬辯護士會に加入し神田區猿樂町一丁目に事務所を開設、高崎市宮元町に出張事務所を設け法律事士に従事せしが明治二十八年十月前橋地方裁判所々屬辯護士名簿に登録をなし高崎市宮元町を本事務所所に東京神田猿樂町を出張所として爾來今日に至る、明治三十五年四月前橋辯護士會副會長に當選爾來重選六回、三十六年六月には高崎市會議員に當選四十二年六月再選、大正九年六月同十三年六月再度に重選し明治四十四年九月には群馬縣會議員に當選

誠に立志傳中の一人者として推賞すべきなり。

鹽田親雄君

金澤地方裁判所判事
明治廿七年九月廿六日生
家族 父宗治(七八)母し(七〇)(原籍地住)妻はる子(二七)長女道子(三三)實兄彰雄川崎造船所在勤弟古川傳二、神戸市に辯護士開業

十月縣會議長に互選さる大正四年九月縣會議員に再選、十二年三度縣會議員に選ばれ次いで名譽職參事會に當選以て現在に至る、其他高崎市學務委員、公園委員、市營住宅建築委員、産業調査委員、市參事會員、司法省破産管財人長野縣普通水利組合會議員同會副議長同議長、高崎市教育會副會長、高崎市中央小學校後援會副會長、國勢調査委員等に歴任し市教育衛生土木其他について貢獻する處尠ならず、又産業方面の發展を期する爲めには上野信託株式會社を起し其取締役に擧げられ其他上野工業株式會社、上野木材株式會社、株式會社世界館等を起し其取締役に就任、地方産業の興隆に資し又同志と相謀り高崎新聞雜誌株式會社を起し其監査役に擧げられ大正十二年には立憲々政會群馬縣支部常任幹事に當選し現在に及べる等其事績殆んど枚擧に遑あらず、大正元年九月には群馬縣民を代表して明治天皇御大葬に參列し御大葬紀念章を受く、性公共心に富み諸種の據金を惜まず赤十字社特別社員に任せられたるを始めとして三重縣知事群馬縣知事等より木杯を受領す

増田君は河合村大字川合に生る、現金澤地方裁判所判事なり、上野町白鳳高等小學校を卒業後上野中學校に入り同校卒業後大阪に出で關西大學豫科文科並に英法科を卒業し直ちに上京早稲田大學に入り同校法學部を卒業、鐵道省大臣官房に奉職して獨學自修つひに辯護士試験並に判檢事試験に合格司法官に任せられ京都地方大津地方の兩裁判所に勤務して金澤地方裁判所判事に轉じ現在に至る、君は稀れに見る苦學力行の人にして中學校卒業後は父兄より些かの學資も受けず或は翻譯をなし或は家庭教師となり又官吏を奉職して今日あるを致したる人にして現代稀れに見るの快男子なり、是等は君が常に自給自足を自己の定見となし青年は他力に頼るべからずと云ふ事を座右銘とせるに據るなり、文藝を好み紅果又は一樂庵と號し俳句を好くし都下大新聞社より俳句會

の選者を依頼さる、前途ある司法官と言ふべきなり

廣岡 丑君

和歌山縣東牟婁郡新宮町
慶應元年四月十日生

家族 妻延子、嗣子九一、新宮高等女學校教諭、姉文榮



廣岡君初の名は丑之介後に丑と改む、伊賀友生村大字喰代の出身なり、資性豪放

無慾にして自己の信條の爲めには直往邁進する人なり故に自我を逞ふせんとする世の所謂財閥とは合はず永年の官公吏生活に一物の蓄財もなく僅かに嗣子を教育したるのみに止まる、壯年時代より有名なる自由民権論者にして毅然として國士の風あり、幼にして苦學を志し大阪に出て憂國の志士として知られたる岡崎高原(今の辯護士)の下にありて法律を研究する傍ら盛んに自由民権論を唱ふ、後岡崎氏が主宰する日本立憲政黨新聞(大阪毎日前身)に入りたるが明治十九年辭して歸郷伊勢新聞社長松本宗一、故代

議士立入奇一、兩氏の勧めにより役人生活をなすこととなり三重警察部に奉職す、後八尾信夫氏阿山郡長となるや隨ひて同郡役所に勤務後復た警察界に入り警部となり千葉縣に轉じ更に三重縣に歸り名賀度會兩郡役所を経て阿山郡役所に勤務す、其在職中懇請されて上野町長となり年餘にして辭し朝鮮政府の雇聘官として同地の警察事務に従ふ事數年寺内總督時代同地に憲兵警察を布くに至りたるが其施設に憤慨し辭して歸國す、後暫く四日市電燈會社に入りたるもその性情元より財閥と相容れざる爲め僅かにして退社後三重縣内難治村の整理村長とも云ふべき役を仰せ付かり君又進んでその難局に接するを好み安濃郡新町飯南郡波瀨村志摩郡和具村、度會郡、大湊町、柏崎村、北牟婁郡錦村等の臨時町村長として其村の紛擾を悉く解決して手腕を謳はれ老ひて益々旺々なるものありしが大正十三年八月腦溢血に冒され目下現住所に靜養しつつあり、因に君は阿山郡役所職中木津慶次郎氏と相謀り産業同業組合を起し産米検査の勵行をなしつつひに之を縣より全國的に普及せしめたる地方産業界の大恩人なり、又上野町長就職中小學校の統一を斷行してその我慢を知られたる人にしてまれに見る清廉潔白の士なり。

追補

上野町ノ部

川合松之助君

上野町大字東町 明治二十一年八月八日生
家族 妻ひさ(三五)長女千代子(二四)長男久男(一〇)二女富美子(六)三子敏子(二)

川合君は藥劑士にして上野町東町に川合藥局を經營す、本姓は西田、父は土松、母かね其四男にして大阪市東區谷町二丁目に生れ川合家に入婚して其姓を冒す、明治四十年三月愛知藥學校を卒業して直ちに藥劑師檢定試験に合格藥劑士の免許を受く、後名古屋大阪等の稅務監督局技手を拜命更に大阪府監吏、同警察部衛生技師等を奉職大正四年辭して上野町に歸り現地に開業して今日に至る、淋病妙藥、ハイリン、ゴニンの發賣元にして其他三十餘種の賣藥製劑元たり、ゴニンは同家の登録にして其名を冠する製藥多し、君性温厚にして家業に熱心なる青年紳士なり。

田中鹿之助君

上野町大字赤阪 明治九年六月廿九日生
家族 妻まさこ滋賀縣龍池村朝比奈家より、長男一雄(二二)伏見福

上野町 カ、タ、ウ之部

上繁由熊君

上野町大字新町 明治廿七年七月一日生

家族 母しよ、妻よし子(二七)植中、植杉、岡理、長女、長男博信(九)二男博昭(一)此項六四頁ノ訂正

上繁君、父は弘吉其長男にして山口縣熊毛郡室津港に生る、現上野



町新町上繁寫眞館の主人公なり、年十六歳にして大

阪に出で同地船場田村寫真館に入り寫真技術を學ぶ事三ヶ年、後歸郷して柳井津小野本寫真館に勤務し更に朝鮮龍山崎寫真館に技師として勤務す、後内地に歸り滋賀縣木本町彦根町等の寫真館に技師として勤務し大正四年上野町上原寫真館主の懇請を容れて來野、大正六年上原寫真館の營業權一切を譲り受け大正八年上繁寫真館と改稱、大正十一年現在の洋館撮影所を新築して今日に至る、資性豪直にして富貴に媚びず自己の所信に直進する人なるが故に技師又卓拔なり、大正十五年一月新町評議員に選ばれ今尙其職にあり園基とモーター乗用を嗜味とす。

町井秀太郎君

上野町大字徳居町 明治二十年十月二十七日生

家族 妻みづ子(四五)上野町福居町本莊新五郎二女、長男尙(二六)内務省復興局在勤、二男清(二四)神戸高商在學、長女つ子(二二)女子師範在學、二女ふみ子(一八)阿山高女在學、三女みれ子(一五)

町井君は阿山郡に於ける老教育家として尊敬を拂はれつゝある人なり、父は爲一舊久居藩士なり、母はみさ子其長男にして一志郡久居町東鷹跡町に生る、明治二十六年三重縣師範學校を卒業し松坂、龜山、名張、三重郡菰野、同大矢知等の尋常高等小學校に勤務し一時退職したるが鳥ヶ原小學校が校紀紊亂の

爲め前校長免職の後を受けて就任し後更に西柘植、山田両校も同様の状態に墮れる爲め之に轉じ校長として大いに校風を肅正し大正十一年八月上野町立男子校も同様の破目に陥れる後を受けて克く校風を維持し面目を一新して今日あらしむ、大正十五年六月病の爲め辭して現住所に静養しつゝあり、君性極めて嚴格、常に教育者は人格者たらざるべからずと云ふ事をモットウとして部下を統率し酒も煙草も採らず故に眞面目なる教育者として尊敬せらる、魚釣、狩獵等を得意とし考古學生物學等の研究に興味を有す。

松本源一郎君

上野町大字觀砲町 明治十年八月十七日生

家族 母さみ(七四)妻死去、長男成一(一八)大阪成器商校在學 松本君は靱田村の出身なり、阿拜山田郡立高等小學校を卒業し、後白井貫造塾に入りて漢學を修む、後大字區長、靱田村々會議員二期、信用組合評定委員、養蠶組合長等に歴任し近村隨一の熱心なる農村開發者として功勞多し、即ち或時は沼を埋めて耕地を作り或時は耕作道を開通せしめ、又は區有林整理等地方の爲め至らざるなき奔走をなし村より銀盃を受領す、大正十年以來上野町に住し現在に至る、園

碁、將棋等を好む。

杉森萬之輔君

上野町大字惠美須町 明治十七年十一月廿一日生

家族 妻りょう(四一)長女きやう(一九)阿山高女出身、長男義雄(二七)上中在學 杉森君本姓は井上、父は義雄其二男にして上野町字愛宕町に生る、井上武五郎氏の令弟なり、上野中學校第一回の卒業生にして同校卒業後上野稅務署に奉職後半田、藤枝、知立等の稅務署に勤務し大正九年依願退職して同年十月伊賀上野銀行に入る、大正十一年同行が百五銀行と合併するや隨ひて同行上野支店の後を繼いで上野町助役に就任今日に至れるなり、資性温厚にして頭腦明晰田中町長の信任厚し、業務に熱心なる點より町民の信任漸く多きを加へつゝあり、前途大いに期待すべきものあり。

玉臺常太郎君

上野町大字徳居町

(此項は二六頁玉臺常太郎君項參照)

調査當時調査員が「玉」と「王」の相違を明瞭に書せず行書にしたる爲め執筆者に於いて玉と王を誤り上野町オノ部に編輯玉臺常太郎君とせるにつき茲に

誤りのみを訂正す。

友生村ノ部

和田竹五良君

友生村大字喰代 明治五年十月二日生

家族 養女くま(三三)同字平井家より、婿庄四郎(三三)同字保田家より 和田君は農とする友生村の有力者なり、明治二十七年以來區村の要職に歴任し功績顯著なるものあり、友生村及び大字喰代より表彰されたる人なり、即ち友生村助役となり明治三十七八年の役に際し村民を督して義勇奉公の誠を致せしめ功により勳八等に叙せらる、後村長に選ばれ公有林野整理の困難を斷行し基本財産を創設す、明治三十七年以來村會議員に舉げられ公利民福の爲め畫策する處尠からず、明治四十年以來大字區長に推され俱樂部の建築、道路の改修、墓地の整理、青年の指導、電燈架設等をなし功績顯著なるものあり其公職にあること實に三十餘年一日の如く地方改發の爲め力を致す、大正十五年五月決然として途を後進に譲つて勇退す、村民之を惜み百方留任を乞ふも容れず餘生を農に親しむことなる。

山田村ノ部

南角長左衛門君

山田村大字平田 明治十五年二月二十七日生

家族 父乙松(六五)妻さく(四一)同字山田健次郎長女、長男敏郎(二二)長女昌子(一六)姉ひでの(二二)同字中墨安次郎長女、弟金左衛門(四一)長英(三四)長藏同字堀川家養嗣子

南角君は旅館兼料理店角屋の主人公なり、明治三十五年補充兵として歩兵第九聯隊に入營、日露戦役に参加し功あり勳八等を賜ふ、凱旋歸郷後家事に従事し誠實業に服して信任を得大正三年には大字區長に擧げられ大正十年迄勤続す、大正十四年には衆望の歸する處同村々會議員に當選して現在に至る、君性温厚にして子弟を勞はるの情厚し令弟金左衛門君は警部として宇治山田署に勤務し長英君は上野中學校を卒業後陸軍士官學校及び砲工學校、帝國大學工科等を卒業現に航空大尉として現役に服しつゝあり、一家一門克く榮へつゝある目出度き家庭なるが其因は君の亡母とま子刀目が稀れに見る賢婦人にして君の父乙松氏を助けて子弟を教養することの熱心ありしと云ふ、此親にして此子あり、一村の範とするに足るべし。

東 秀次郎君

山田村大字眞泥 明治十年十月七日生

家族 妻ゆわ(一五〇)長男政雄(二七)長女ひさ(一六)婦長(二五)府中村印代村島兼次郎長女

東君は農を業とする山田村の有力者なり、本姓は村島、府中村大字印代村島兼次郎君の弟なり、東家に入婿して其姓を冒す、性温厚公共心に富み衆望を蒐む、消防小頭、字總代、共同苗代管理人等に歴任して信任を得、大正十四年三月には選ばれて村會議員となり現在に至る、君は事業を好み同志と謀り山田製材株式會社を創立して其重役に擧げらる等常に地方開發の爲めに力を致しつゝある人なり。君の長男政雄君は大正八年歩兵第九聯隊に入營衛生隊附となり兵役の義務を了したる人にして前途を囑目されつゝあり。

名張町ノ部

岡本文六君

名張町大字柳原 明治二十三年五月十二日生

家族 父熊藏、妻初枝、長男文夫、次男弘文、長女りよ、次女榮子
岡本君は奈良縣山邊郡東里村大字上笠間峠に生る、現三重縣農林技手なり、明治四十五年三月東京麻布

獸醫畜産學校を卒業し獸醫免許狀を下附せらる、大正元年十二月京都騎兵第二十聯隊に一年志願兵として入隊大正三年見習獸醫官となり滿期歸郷、同年七月奈良縣榛原町家畜市場獸醫を拜命、大正六年四月上野警察署衛生技手に轉じ同年陸軍三等獸醫に任じ正八位に叙せらる、大正八年四月名賀郡農林技手に轉任を命ぜられ、大正十二年三月陸軍二等獸醫に昇級さる、大正十五年七月地方官制改正の結果三重縣農林技手に任せられ名賀郡擔當を命ぜられて今日に至る、常に畜産思想の普及せざるを慨じ之が喧傳に力を致し一時千四百頭に迄減少したる畜牛を千九百頭に増加せしめたる外畜牛勞力の利用畜牛の繁殖、育成、肥育等に力を致し成績見るべきものあり近時乳用牛の必要を喧傳し之が普及に努めつゝあり、誠に感すべき熱心家と言ふべし。

阿保町の同出張所官舎に住す、飯南郡川俣村大字七日市に生る、資性温厚にして直卒、富貴に媚びず嚴然として古武士的官吏の面目を持しつゝある人なり伊賀に赴任以來阿保、上野、柘植等出張所に勤務し後再び阿保出張所詰めを命ぜられ現在に至る、地方民に理解されたる温厚の登記官なり。

上津村ノ部

内保孝徳君

上津村大字下川原 明治廿年十一月廿一日生

家族 祖母、妻外に子供三人

内保君は上津村社式内比々岐神社兼奥山神社々掌を勤務する傍ら上津小學校に奉職しつゝあり、京都師範學校の出身にして同府下丹後宮津附近山城國山科等の小學校に奉職し大正八年辭して歸郷同年再び瀧川小學校に勤務し爾來美旗、上津等の三校に奉職し父の歿後其家職を襲ひ前記神社の社掌となり傍ら上津校に奉職して現在に至る、資性温厚にして村民の信任あり稀れに見る人格者として推賞さる、内保家は藤原氏の末流にして徳川の中世阿山郡玉瀧村大字内保に移住して藤堂氏に仕ふ、廢藩に際し上津村に住し現在に至る。

吉川富藏君

阿保町大字阿保 明治十七年二月五日生

家族 三名、長女は縣立女子師範校二部に在學中

吉川君は現上野區裁判所阿保出張所主任書記にして

昭和二年六月十日印刷
昭和二年六月十三日發行

三重縣阿山郡上野町大字上野字池町一三一九

著作人 村主孝 郎

三重縣阿山郡上野町大字上野字丸之内四〇

發行人 中林正三

名古屋市中區南小川町四三番地

印刷人 加藤秀吉

名古屋市中區南小川町四三番地

印刷所 丸八印刷株式會社

三重縣阿山郡上野町大字上野字丸之内四十番地
合資會社伊賀時報社內

發行所

伊賀ノ暖簾卜人物社

電話四〇四番
振替名古屋九二七五番

終

